

柳生嚴周伝の研究(一)——新陰流を哲学する

赤羽根 龍 夫

一

平成十六年三月、私は柳生新陰流、特に將軍家兵法指南であつた江戸柳生の歴史と、柳生正木坂劍禅道場元師範・大坪指方直伝の新陰流の刀法を内容とする『新陰流を哲学する——江戸柳生の心法と刀法(一)』を上梓し、柳生新陰流の關係者や師範の先生方にお贈りしたところ、各方面から御返事や御連絡を頂いた。大坪先生から新陰流を習われたことのある江戸柳生十六代・柳生宗久氏からは、

ご本を頂き有難うございました。大坪先生や江戸の特徴がよくわかり興味がつきません。私共が習つたのは三学とりあげ使いのごく初歩の部分でしたし、当然、型を習うのでその意味する所は座学としても話して頂ける段階に達していなかったのだと思います。鍋島様にも一部さしあげて当時を思いだし話題と致しました。……

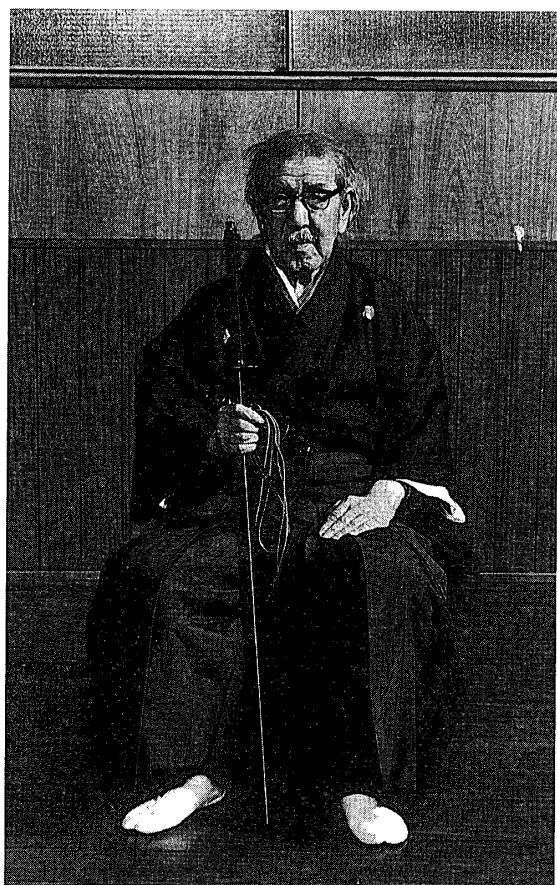
という御返事を頂いた。鍋島氏とは、江戸柳生の祖・柳生宗矩から『兵法家伝書』を最初に受伝した宗矩の高弟・小城鍋島藩主元茂の子孫の方であり、宗久氏と共に大坪先生に新陰流の手ほどきを受けられた。しかし半年ほどで大坪先生が病に倒れられて稽古は中断してしまった。

宗久氏とは、著者が一九九八年に上梓した『徳川將軍と柳生新陰流』(南

窓社)をお贈りして以来、何度か江戸柳生の資料を拝見にお宅にお邪魔させていただいている。

名古屋の尾張貫流槍術第八世・加藤伊三男先生からは、お出でいただければ著者の疑問にお答えいただけるという御連絡があり、早速、春風館道場にお邪魔した。

この道場では幕末期の尾張柳生十代宗家・柳生嚴周直伝の新陰流が、嚴周の高弟・神戸金七かんべに学び、神戸より尾張貫流槍術と新陰流の免許皆伝を受けた加藤伊三男師範によつて、張り詰めた雰囲気の中で真剣に教授されていた。これまで私は嚴周伝は失伝されたものと思ひ込んでいたので、江戸時代のままの新陰流が多く門弟によつて稽古されていることは大きな驚きであつた。その稽古も、小手を着けて激しく拳こぶしを打つという、新陰流独特の袋竹刀の特性をよく生かしたスピード感あふれるものであつた。また門弟の多くが小学低学年から稽古しているということにも感激した。神戸先生は昭和五十五年に八十七歳で亡くなる直前まで道場に出ておられたので、高弟の多くは神戸先生から直接指導を受けられ、目録を受けている人もいるとお聞きした。現在、道場の事務局長を務めている下村幸裕氏は、中学生の時に、八十五歳の神戸先生と槍の試合稽古をされたそうである。



神戸金七 (87才)

道場には、新陰流の基となった陰流の祖・愛洲移香斎が中国から持ち帰ったといわれる槍や、柳生連也が使用した、袋竹刀をかたどった木刀、巖周の使った木刀、神戸金七の晩年の写真、下條小三郎の書が壁に掛けられており、この道場の由緒の正しさを語っていた。下條の書には「心法無形通貫十方」とあった。この文は柳生石舟斎の「新陰流きりあい相口伝事」の文章であるが、下條直伝の大坪伝を継承・研究する私には興味が尽きなかった。昭和四十九年十一月に神戸金七が日本古武道協会に提出した自筆で書かれた「御流儀略歴」には道場名を「春風館」、代表者名を「神戸金七継承者 館長 十二世加藤伊三男」として次のようにあった。

一、武道特徴

柳生新陰流の特長として先師上泉信綱創始による、ひきはだしな竹刀を以て練習することにある。
貫流槍術は、やりに管を用いて使うことである。世にこれを、くだやりと云う。

二、武道解説

当流兵法は太刀目録、截合目録、没茲味目録を骨子として、後、如雲斎の始終不捨書目録を合せて四巻あり。これらの書物をよく熟読玩味して術伝口伝と共に練磨すること、又別に古目録なるものあり、これら古意新意を悟得して向上の研究を必要とする。

貫流槍法は流祖信之伝うる五本、表裏合せて十本を以て基本とし、円月槍法を教えたり。又俊足なる入身は特に警戒を要する旨を注意して居る。

続けて「柳生新陰流の起源と其の歴史」が書かれてあり、最後に柳生新陰流道統が記載されている。そこには柳生兵庫助利としと巖を尾張柳生の初代として十代柳生巖周・十一世神戸金七・十二世加藤伊三男とあった。

神戸金七は明治時代という武道混乱期に柳生巖周の教えに素直に従っただけでなく、柳生新陰流に並外れた情熱と才能を示したので、巖周に特に目をかけられ、新陰流のことごとくを伝えられて柳生新陰流を継承している。また巖周に深く信頼されていたことは、門外不出の柳生文書をすべて書き写すことを許されたことによっても明らかである。

その神戸金七が写した膨大な柳生文書を開きながら、加藤先生は私の質問に耳を傾けられた。

尾張柳生第十代・柳生巖周の高弟といわれた下條小三郎と神戸金七が誰から江戸柳生を学んだかということが、柳生新陰流研究における、これまでの私の最大の疑問であったが、それに対して、加藤師範は明快に「御二人とも巖周先生から江戸柳生を習われた。それ以外にいたとしても尾張柳生家の分家の柳生忠三からで、それ以外にはないと思います」と答えられた。(後に大坪先生の「子息に始めてお会いして同じ質問をしたが、それ

は厳周先生からです、と明言された。」

加藤先生はまた「江戸柳生と尾張柳生は昔から不仲ではなかった。厳周先生は江戸と尾張は絶対に離すことは出来ないと考えて、技も尾張遣い、江戸遣いというように両方遣われ、弟子にも教えていた」と話された。その日、御貸しいただいた神戸金七編『柳生の芸能』（昭和四八年）の「はしがき」に、神戸金七が柳生厳周に聞いた話として次のようにある。

師曰く。江戸と尾張の関係は、江戸は本家、尾張は分家と云うことになって居る。また面白いことに、一般には江戸と尾張とは不仲にて、音信もなきように伝えられて居るが、それは表向きのもので、実はたがいに相因り相たすけて明治の維新まで続いたことである。

これ以外にも「寛政頃には尾張より柳生厳光、柳生義質等の人々が相談相手として、応援にかけつけしことあり」等、江戸柳生と尾張柳生の親密な関係が語られている。

また亡くなる二ヶ月ほど前の昭和五十五年二月二十八日に書き上げ、二十五年後の平成十六年七月に加藤先生によって出版された『月之抄と尾張柳生』の「はしがき」を次のように書き始められている。

今回柳生十兵衛子著作による、月の抄を解明するに当り、尾張柳生と江戸柳生の関係を、内面的に知ることが、最も必要な点であると思う。両者は一般に不通とか疎遠とか言われて居るが、実際は至って親密に相寄り相扶けて、流儀の宣揚に努めたことである。

同書は「現存尾張柳生伝書類」をもとに「新陰流表討太刀目録」「二七箇条載相之事」「習之目録之事」などの貴重な文献を載せて神戸が解説を加え、さらに十兵衛の「月之抄」の部では神戸の解説以外に「尾張柳生の

考え方」と「江戸柳生の考え方」を載せている。

また厳周の叔父に当る柳生六助厳広の手紙を引用して「この手紙にある通り、徳川時代江戸柳生は本家、尾張柳生は分家として交際ありしこととおもわる」とある。

しかし厳周の子息の厳長は江戸と尾張の関係を逆転させ、「正統尾張柳生、別派江戸柳生」（『正伝新陰流』昭和三十二年）として尾張柳生を正統としている。また尾張柳生と江戸柳生は初代・利厳、宗矩以来不仲であったと言う。

不仲説の元となったものとして、兵庫助の妹の再婚を兵庫助に相談なく進めたことに腹を立てた兵庫助が江戸柳生家との交際を絶ったという説があるが、兵庫助の高潔な人柄からみて有り得ない話である。また將軍家光の御前での試合で江戸柳生三代・柳生宗冬が尾張柳生三代・柳生連也に親指を打ち砕かれて破れたのを、江戸柳生が遺恨に思い不和となったという説があるが、神戸は『月之抄と尾張柳生』で、当日の「連也・厳包覚書」には「巷間伝うる処の宗冬と連也との試合のことは何も書いて居ない」と言い、柳生新陰流研究の第一人者・今村嘉雄も明確に否定している。

二百五十年の間にその程度の噂話しか存在しなかったのは、むしろ両家の親密な関係を物語っているとも言える。

また本家、分家ということも、柳生の領地は秀吉によって取り上げられていた先祖伝来の土地を、関が原の戦いの働きによって家康から宗矩に与えられたものであるから、江戸柳生家の領地であることに問題はない。さらに宗矩が徳川將軍家の兵法指南役にならなければ、尾張藩は柳生利厳を剣術師範として迎えることはなく、尾張柳生も存在しなかったことは疑いない。厳周が「江戸は本家、尾張は分家」というゆえんである。

ただ明治以降、尾張柳生家と違って江戸柳生家は兵法に関心を示さなかった。そこで厳長は尾張柳生を前面に押し出して行くために、ことさらに江戸柳生を低く見て、江戸柳生との違いを喧伝することで尾張柳生の正統性を主張しようとしたのかもしれない。

ただ柳生新陰流の祖・柳生石舟斎宗厳むねよしの五男の宗矩に対して、尾張柳生家は、宗厳の長男・厳勝の子の兵庫助利厳を祖とするので、長男の血統を重んじる立場から言えば、厳長の言うところに理屈がないわけではない。ともかく尾張柳生宗家としての厳長の使命感から出た発言であることには違いないし、明治以降の柳生新陰流の興隆は、厳周と並んで厳長の活躍のおかげをこうむっていることは確かである。

しかし厳長は江戸柳生と尾張柳生との対立をことさらに宣伝しただけでなく、江戸柳生は上泉伊勢守・柳生石舟斎以来の新陰流を誤って伝えていくという。『正伝新陰流』には次のようにある。

察するに宗矩は親父の本伝を宗矩流に解釈・祖述して……、時流に適した平易化とともに……十兵衛もそれに倣い……三代宗冬の不肖の道業をもって、古来の正伝の本伝は亡佚・誤伝の著しいものを、後世に遺すにいたったのである。(133頁)

しかし私見によれば、厳長は江戸時代以来伝えられてきた新陰流の技を、明治政府が採用して小学校教育を通して日本全国に広まったヨーロッパ近代の身体操作に合うように変えてしまっている。

これはどちらが正しいか間違っているかという問題ではない。尾張柳生の祖・兵庫助利厳はすでに「身の懸かり五箇を昔の教えの如くに前にて作るは悪し」として、上泉伊勢守以来の「沈なる身」から「直つた立たる身」(二十頁参照)へと兵法改革をおこなっているし、連也は初学者用に「取り上

げ使い」を考案し、尾張柳生の表看板というべき「合がっし打うち」も連也の作ったものであると伝えられている。また尾張柳生の兵法補佐役であった長岡房成(一七六三—一八四九)の時代には制剛流が外伝勢法せいぽうとして尾張柳生に流入している。尾張柳生家には新陰流を時代に即したものにしようとする改革の気風が昔からあったのである。

明治以降、日本が近代ヨーロッパをモデルとして近代化を推し進めて行った時代には、厳周の技を近衛師団の剣道師範にもなった厳長が近代的身体操作に合うように変え、その子・延春氏が現代剣道風に変えたとしても、それは新しい時代に適合した考え方と言えなくはない。

しかし現代、明治以降、日本がヨーロッパ近代から受け入れた身体観が大きな疑問に直面している。

明治政府は富国強兵のために、ヨーロッパ近代の軍隊育成のための体育を受け入れ、行進のための歩き方や整列の仕方、号令をかけて一斉に行う体操が小学校教育を通じて日本全国津々浦々に普及していった。

江戸時代までの日本人は、肩を落とし腰を引き、その結果として丹田に力が落ちている姿が自然体であるとされていたが、ヨーロッパ近代の軍隊的身体観が普及したため、胸を張り、腰を反そらせて立つことが正しい姿勢とされることになった。それは身体にロックをかけた状態であり、見た目に均整がとれ、外から号令をかけて動かしやすいが、身体の内的な感受性から動くことを阻害する結果となってしまう。

明治中頃以降、日本人の身体の動きは江戸時代までの日本人の身体というより、ヨーロッパ近代、しかも軍隊的な身体の動きとなっていた。しかしそれらは日本人の身体に合った方法ではなく、結局、日本に根付くことは出来なかった。

その結果、日本人は日本的身体を失ったが、日本人の身体観の基礎とな

るべき新しい身体観も確立していない。肘をついたり、背もたれに寄りかからなければ椅子に座れない多くの日本人や、道路や電車の中で座り込む高校生に象徴されるように、現代の日本人の多くは「腰抜け」「腰砕け」になってしまっている。現代日本の若者が抱えた多くの問題は、精神の問題以上に身体の問題から生じていることが指摘され出でてきている。

日本人に合った新しい身体観が生じなければ日本人は健全な精神を育むことは出来ないであろう。そこから古武道に対する関心も生まれている。

また筋力的にヨーロッパやアフリカの人たちに劣る日本人が、明治以前には信じられないような体力を持っていたことが注目され、スポーツにおいても江戸時代までの日本人の身体観に対して関心が向けられている。

剣道も江戸時代までの伝統的身体観から大きく隔たってしまったている。

常に右足を出して踵を浮かし、手を伸ばして飛び込んで打つ現代剣道は、江戸時代までの身体の動きとはまったく相反したものである。



神戸金七（87才）と加藤館長

武蔵は『五輪書』で足運びについて「足の運びよくのこと、常に歩むがごとし」と書いているし、柳生宗矩は『兵法家伝書』で「歩みのこと、いつものごとくすると歩むがよきなり」と言う。また武蔵は「踵を踏め」といい、それは柳生新陰流でも他の多くの古流でも同じである。

ではなぜ、現代剣道が常に右足を前に出して踵を浮かせる足運びとなつたのであろうか。そこに剣道や他の武術だけでなく、日本人の身体観にとつて重要な問題が含まれている。

この足運びが流行しだしたのは幕末期であるといわれている。

柳川藩の真陰流の剣術師範・大石進が江戸に出て、各流派の剣術道場到他流試合を申し込み、四尺（一二〇センチ）あまりの長竹刀でことごとく打ち負かした。この時、大石に勝つたのは男谷精一郎ただ一人で、千葉周作は四斗樽のふたを竹刀の鐔の代わりにして大石の突きを防いで引き分けになったという逸話が伝えられている。それ以降、それまでは三尺三寸（一メートル）前後であった竹刀に替わって五尺（一五〇センチ）に及ぶ長い竹刀が流行したと言われる。

大石進がほとんど「突き」で相手を破ったように、長い竹刀は「突き」に威力を発揮する。柳川藩の剣術師範家の出身でありながら、大石は剣術が苦手で「ウドの太木」と言われていた。そこで得意な槍にヒントを得て、天井から吊るした小石を長い竹刀で突く練習を繰り返し、突き技を自得した。藩一番の剣術遣いを破った大石は腕試しのために江戸に出て名を挙げたのである。

私は春風館道場で槍の試合稽古を見て、槍の素突きの手ほどきを受け、現代剣道の竹刀捌きや体捌きの仕方は、剣術より槍術からヒントを得ているという印象を持った。

槍は長いので歩み足では先がぶれてしまう。そこで間合いから突く場合

は常に右足（または左足）が前の送り足である。長い竹刀の場合も、ぶれないようにするために槍と同じ送り足となる。

一方、槍は重いので、後ろ足は踵が地に着き、つま先が左に開いた撞木足となるが、槍のように重くはない竹刀は、長い場合、真直ぐ進むときは、踵を浮かしてつま先を相手に向けたほうが前に進みやすくなる。また長い竹刀は槍と同様、大きく振り回すと相手に手元に入り込まれる隙が生じやすい。そこで相手からは遠く自分から相手は近いという利点を使って、小さく振り被って真直ぐに面を打つことが勝ち口（勝つための術理）となる。

こうして長い竹刀の流行によって、常に右足を前にして、左足の踵を浮かせる送り足で、振り被らずに面を打つという現代剣道の原型が生まれたのではないか。以上はこれまでの研究と、春風館道場で槍の試合稽古を見たとき、基本操作を学んだことにより生まれた試論である。

現代剣道のもとには北辰一刀流にあると言われているが、千葉周作は幕末にすでに次のように撞木足を戒めている。

剣術に左足を踏み据るは、はなはだ悪しきことなり。進退自由ならずして、器用の働きは成らぬものなり。若し箇様の人あらば試めし見るべし、極めて無器用のものなり。（『剣術初心稽古心得』）

幕末から明治にかけて長い竹刀の流行と竹刀剣術のスピード化にともない、踵を上げてつま先だつて打つ「飛び込み面」が重視されるようになっていった。こうして腰を落として丹田に力（氣）をこめる日本の身体が否定され、腰を入れて胸を反らす西欧近代の軍隊式身体観が学校教育を通じて広まっていくのに応じて現代剣道の独特な自然体が形成されたのである。

現代剣道は一刀流免許皆伝で東京高等師範学校の剣道師範であった高野

佐三郎によって体系付けられた。高野は明治四十四年に中学校で剣道が正科として採用されたのに応じ、学校教育で多人数一斉に教授する必要から、それまで多様であった剣術の技を画一化していった。常に右足前の送り足を採用し、「飛込面は軽くも探るべし」（『剣道』大正四年）と、飛び込んで打つ面技を重視した。

一方、高野と並び称された中山博道は古流剣術を重んじ「昔の形に一つでも飛び込んで打つ手はない」と批判し、竹刀も三尺六寸のものを常用し、昔からの足運びである歩み足を重視した。しかし高野の技法が学校教育を通じて一般化し、戦後は剣道のスポーツ化に伴い高野の技法が主流となつてしまった。西欧近代の軍隊的身体観の見直しが叫ばれている現代、中山博道の考え方を真剣に見直すべき時が来ている。博道は次のように言う。

全日本剣道選手権大会を観て、そこに集まる選士連の竹刀捌きは、私から見ても器用につきてはいるが、あれは竹刀捌きで、忌憚なく申し述べれば、及第点をつけられる者は只の一人もないと言える。よつて竹刀選手権と改称された方がいいとさえ存じている。あんな攻守両面を日本刀ではとても思いもよらぬことであつて非常識もはなはだしいとさえ考えてあえて苦言を呈する。……

一部の人は、竹刀競技で少しも差し支えない、難しいことはいうな、とするが、元来、この二つ（竹刀による試合稽古と型・組太刀）は昔時においては一本であつて、この一本を称して武道といった。二つに分けたことが、そもその誤りで、武道に新古はない。竹刀すなわち全剣連も、古武道すなわち各流の形も、みな一体となるのが当然である。『剣道口述集』

現代剣道と古流剣術が二つに分かれた原因は、足運びのみならず竹刀の

長さを三尺八寸（現代では三尺九寸）に決めたことにある。しかし男谷自身は短い竹刀を使ったといわれる。

幕末の剣聖と言われた男谷精一郎が、当時流行した四尺以上の長竹刀の弊害を防ごうと三尺八寸に決め、男谷ほどの名人・人物が決めたことで動かすべからざる権威となってしまうたが、本来は、刀の長さの三尺三、四寸を定寸とし最大を三尺八寸とすべきであったであろう。

男谷自身が「長寸にての稽古は、ただ今日稽古場中の勝口を専らと致し候迄にて、武刃の吟味とは更に申されまじく候」（『武術雑話』）と記している。

現代剣道が真に武道といえるためには、足運びや打ち方を江戸時代の方法に戻さなければならないであろう。竹刀の長さを刀の長さに戻し、面打ち重視の考え方を改め、拳を下から打つ技や撥草から横面や肩や拳を打つ技が見直されなければならない。その為には竹刀や防具の改良が必要となる。新陰流の、竹の先を八または十六に割った袋竹刀や尾張貫流槍術の耳を防御した面、肩などが参考になるであろう。私は剣道の小手の筒の部分を五センチ長くし内小手もカバーした小手を使っている。

剣道修行者の多くがアキレス腱や膝を痛めていることでも現代剣道の足運びの誤りは明らかである。また東洋の体育や武術は呼吸法を最も重要視する。古流剣術は打った後に左手が腹の位置に収まり自然と複式呼吸となっているが、手を伸ばして肩の高さで面を打つ剣道は息が胸でつかえて腹におさまりにくい。この事実からしても現代剣道は日本の武道というより、スポーツの身体使いとなってしまうている。

七、八段の高段者になると同時に体力が衰えて初めて、竹刀を少し右に開いて構え、足も撞木に近くなり、手を振り上げて打ち、打ちきった左拳の位置が腹まで落ちるなど古流剣術に近づく場合が多いが、初心者や子供の

にこそ、正しい剣道を教えるべきである。

付言すれば、学校剣道の草創期から問題になっていることであるが、硬い竹刀で頭を強打することの弊害にも早く気がついてほしいものである。昔と違い脳と眼を酷使用する現代社会においては、脳を強打することは避けるべきである。剣道の競技性のすばらしさは明らかであるので、古武道との対話や技術交流によって、剣道が真に日本の武道となることを願ってやまない。

時代に合うように新陰流を改革しようとした厳長に対し、厳周は自分に伝えられた江戸時代の新陰流をそのまま後世に伝えることを目的とした。神戸金七は厳周の行き方に素直に従い厳周伝を伝えることを使命とした。その考え方は加藤伊三男師範にもそのまま引き継がれている。

江戸柳生と尾張柳生との関係においても、厳周は江戸柳生と尾張柳生を分けなかった。神戸金七も厳周の教えを素直に受けて、「尾張遣い」、「江戸遣い」ということで両方を教え、それを加藤師範がそのまま受け継ぎ、現代にいたるまで厳周の考え方や技を伝えているのである。

一方、大坪伝は厳周伝を体捌き重視の形に変えたが、その元となった合気柔術は江戸時代の身体遣いを変えていない。

先日、大坪先生の関係者にお目にかかったとき、神戸先生、大坪先生にまつわる興味深い逸話を聞いた。柳生の里の正木坂剣禅道場では毎年夏に剣道の高段者対象の講習会が開かれる。そこで、毎回剣禅道場の師範である大坪先生が柳生の剣について講話された。ある年のこと、その年の全日本剣道大会の優勝者も参加していたが、その人は大坪先生の話を聞いて、話しだけでは分からないと、人を介して大坪先生との立会いを望んだ。そこに同席していた神戸先生は、「大坪先生はかなりおやりになる。しかしとりあえず私が立会いましょう」と言われた。そのとき神戸先生は高齢で

あり腰が少し曲がっていたが、木刀を持って立ち上がられると、背筋がピンと伸びられた。

その剣道の高段者は何度か打ち込んだが、神戸先生にことごとくかわされてしまった。神戸先生は、「もつとしつかり打っていらっしゃい」と言われたが、一本も打ち込めなかった。そこで立会いの仲介をとった人が「私がいりませんでした」と謝られた。

この話は神戸先生の側から聞いたのではなく、その時、たまたま大坪先生に付き添っていた方からの話である。その後、この話を各所でしたところ、神戸先生が剣道の高段者と試合をして打ち勝ったという話を各方面の方々からうかがった。もちろん新陰流が現代剣道より強いといっているわけではない。神戸先生は新陰流にも現代剣道にも精通されていたので勝つことができたのであって、長い竹刀で飛び込んで小さく面を打つことを重視する現代剣道のルールのもとでは、短い竹刀で拳こぶしを上下左右に切ることを主な勝ち口とする新陰流で勝つことは難しい。

さて神戸金七は尾張柳生家の高弟でありながら厳長から離れていったという批判があるが、神戸金七と厳長が仲違いしたという事実はないようである。厳長は神戸を頼りとしており、厳周が東京に出ていた時期は名古屋の道場の師範代をしていた。また厳長は主な演武会では、ほとんどの場合、晩年に至るまで神戸を相手に選んでいる。

昭和六年二月十四日、名古屋で開催された第三師団剣術競技大会のパンフレットには次のようにある。なお神戸金七の旧姓は服部である。(厳長は制剛流居合を新陰流居合として演武しているが、新陰流には元来、抜刀はあるが居合はないので紙面の都合もあり割愛する。)

剣道型

○ 帝國剣道型

打太刀

堀田徳次郎

仕太刀

加藤七左衛門

○ 柳生流兵法剣道使順

九箇之太刀 (解題、使演)

打太刀

服部 (神戸) 金七

使太刀

大橋喜左衛門

勢法試合 (解題、使演)

打太刀師範

柳生厳長

使太刀

服部金七

燕飛 (解題、使演)

打太刀

柳生厳長

使太刀

中澤保三

昭和七年三月二十七日の「柳生流兵法道場 金剛館」で行われた厳周追悼演武会の「追善武道大会番組」では次のようになっている。

一、三学円之太刀

(一) 打太刀 柳生厳長

使太刀 大津正吉

(二) 打太刀 柳生延春

使太刀 柳生武子

(三) 打太刀 柳生厳長

使太刀 斉藤直芳

(四) 打太刀 大橋喜左衛門

使太刀 伊藤宣昭

二、九箇之太刀

(一) 打太刀 柳生厳長
使太刀 服部金七

三、勢法試合

(一) 雷刀及中段

一、打太刀 服部金七
使太刀 柳生延春〔小学生〕

三、打太刀 柳生厳長

使太刀 服部金七

(二) 小太刀

打太刀 服部金七

使太刀 鹿嶋清孝

(三) 二刀

打太刀 近藤幸三

使太刀 荻尾孝之

七、天狗抄

打太刀 柳生厳長

使太刀 服部金七

八、燕飛

打太刀 柳生厳長

使太刀 中澤保三

九、稽古試合

服部金七

柳生延春〔小学生〕

他六名

なお延春氏と「三学円の太刀」を演武している柳生武子は厳長の娘で、厳周の教えをよく守り、厳周が力を入れて教え新陰流に長じていたが、若くして夭逝したとのことである。

昭和八年の名古屋放送ラジオ番組収録には柳生厳長、神戸金七、鹿嶋清孝、中沢保三が出演している。

昭和十六年の宮内省済寧館道場での「武道大会剣道試合」での演武は次の通りである。

大日本帝国剣道形

範士(打) 斎村五郎

範士(仕) 持田盛二

夢想神傳流居合

範士 橋本統陽

試斬

範士 中山博通

小野派一刀流ノ形

教士(打) 笹森順造

教士(仕) 鶴海成和

柳生流兵法丸太刀

一、三学円之太刀、九箇之太刀、天狗抄ノ中

打太刀 柳生厳長

使太刀 神戸金七

二、燕飛

打太刀 柳生厳長

使太刀 成田雄三

斎村五郎や持田盛二といった剣道界の大御所、昭和の剣聖といわれた中山博道の名が見えて興味深い。当時は剣道界が活況を呈しており、厳長は剣道の高段者を新陰流の門弟とすることに積極的であったが、神戸金七は、それでは新陰流が変質してしまうと危惧されていたそうである。

これ以外にも昭和二十九年の第二回全日本剣道選手権大会では二人だけで新陰流を演武している。

以上は私が調べた資料のうち、日付がはっきりしたものだけを挙げただけであり、これ以外にも多くの記録が残されていると思われる。このように柳生厳長は晩年に至るまで演武する場合は常に神戸金七を選んでいる。

天狗抄の「花車」に顕著のように、厳長は厳周の生存中も独自の工夫を加えていたが、神戸金七は終生、厳周の教えを変えることはなかったため、演武の場合は厳長も厳周伝を遣ったはずであり、また厳長自身は、現在、厳長伝として遣われているほどには厳周伝を変えていなかったと思われる。また、そうでなければ二人で型を演武することは不可能である。

春風館道場で厳周伝を見た私は、江戸時代の技を伝える厳周伝がそのまま行われていることに感激し、即刻入門させていただいた。

加藤師範は「せっかく関東から来ているのだから、まず江戸遣いをしっかり覚えるのがいいでしょう」と「三学田の太刀」の江戸遣いから徹底して教え始められた。

現在、私は週に一度、新幹線で鎌倉から名古屋に通い、高弟の方々に打太刀をお願いして加藤師範に厳周伝の指導を受けている。同時に毎回、私の稽古のビデオを写させていた দিয়ে、鎌倉や横須賀の道場で繰り返し練習した後、私の主宰する「新陰流稽古『沈龍の会』」の会員に稽古台になつてもらつて厳周伝を教えている。教えることが学ぶことの最良の方法であるといわれるように、試みに教えてみることで新たな疑問が次々と生ま

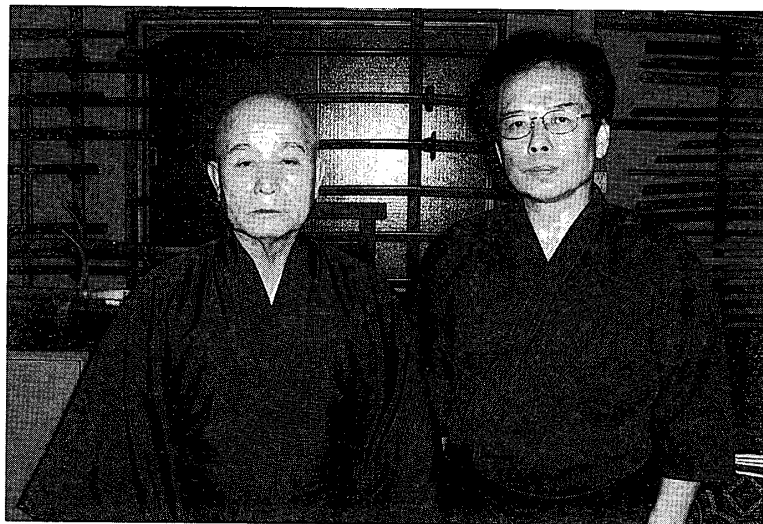
れ、それを次の週の春風館道場の稽古に持ち帰つて加藤師範や高弟の方々に教えを受けている。また高弟の方々による「三学田の太刀」「九箇の太刀」「燕飛」「天狗抄」などの演武をビデオに映らせていただいて、「刀法」の研究や大坪伝・厳長伝との比較検討をしている。

本年の四月からは私の勤務する大学の授業に「古武道講座」を開設して若い世代に新陰流を伝えていくことになった。

また機会を得て、千葉に個人道場を構える吉田鞆男師範に一ヶ月に一度、厳長伝の新陰流と一刀流の古伝の教えを受けている。吉田師範の父・重成は尾張一五〇石の尾張藩士の出で諸流の剣術を修め、新陰流は厳周、厳長の門弟であった。吉田師範は五歳の頃から父に厳長伝の新陰流の教えを受

けたそうである。吉田重成は厳周追悼大会では居合の演武に名を連ねている。

吉田家は親子二代にわたつて一刀流と新陰流の古伝書の研究とそれによる古伝の復元をされている。若い時にフランスでギリシア哲学を学ばれた鞆男氏は、その素養を基に、一刀流と新陰流それぞれの刀法を支える一貫した理念（アイデア）を探究されている。また特に津軽藩に伝わる膨大な一刀流津軽伝書により、本来



加藤館長と筆者

の「切り落し」は、お互いに正面を打ち合う現在の型ではなく、腰を落として顔の前に斜めに構えた太刀で、正面を打ってくる打太刀の太刀を手前に車に廻して受け流すことで、打太刀の太刀が切り落ちる刀法であるということを立証されている。

これまで私は、鎧兜を被って戦った戦国時代末に生まれた一刀流の表看板ともいえる「切り落し」が、正面を打ち合う刀法であることに疑問を抱き続けてきたが、吉田道場で始めて納得のいく解答が得られた。新陰流の「一刀両段」同様な変化が一刀流にもあったのである。

実際の戦いでは、袈裟切りで首や腕を斬ったり、逆袈裟で拳や、わきの下を切り上げる刀法がほとんどであり、相手に正対して正面から頭を打つことは心理的にも刀法上からも難しいと言われている。正面打ちは、江戸時代中期になって鎧を参考にした防具の改良と同時に、剣術が実戦から離れて観念化することにより生まれて来たものではないだろうか。真直ぐを正しいとする儒教的な観念は現代剣道にそのまま受け継がれているが、それこそが剣道を硬直化させている原因ではないだろうか。

以上、私は新陰流の本質に少しでも近づくために、巖周伝をそのまま受け継ぐ神戸伝、巖周に高く評価されていた下條の伝を受け継ぐ大坪伝、巖周の血筋を受け継ぐ巖長伝と、新陰流の三つの流れ全体の修練を続けている。

しかしこのことで私の先の論文の疑問が完全に解決されたわけではない。尾張柳生の師範が伝える江戸柳生ではなく、江戸柳生の師範直伝の新陰流は現在残されていないのか。神戸金七については多くの点が解明されたが、下條小三郎については未だほとんど分かっていない。同じ巖周の高弟でありながら神戸金七と下條小三郎の新陰流が、似ていながら多くの違

う点があるのはどうしてなのかという新たな疑問も生まれている。

最後の疑問に関しては、大坪伝と神戸金七が伝える巖周伝を比較して一つの仮説を持つようになった。私は「沈龍の会」で刀法を教えている以外に、生涯学習として大坪伝や合気柔術を元に作った「新陰流体操」を教えているが、剣術だけではなく古武道そのもの関心を持つ人々には、大坪伝の方が学びやすく、「三学円の太刀」や「九箇の太刀」の技がそのまま体捌きに応用されやすい利点がある。現在、私が合気柔術の指導を受け、また大坪伝新陰流の共同研究者である稲益氏は、大東流合気柔術と大坪伝の新陰流の体捌きをもとに「合気躰術」を創流している。

これらの経験から私は、下條は大坪先生を連れて東京若松町の植芝道場で植芝盛平に新陰流を教授したとき、新陰流の技を合気柔術に合うように、体捌きを強調する形に替えたのではないかと考えるようになった。

大坪先生は、若いころ武田惣角に四、五回、手ほどきを受けたことがあり、昭和六年、植芝盛平には新陰流の「無刀の位」を教えるかわりに、一年半ほど合気道を習ったと語っている。植芝盛平は当時、剣の間合いと剣を持たず素手で相手に対する場合の間合いの違いについてしきりと研究していたそうである。植芝道場に入りした海軍将校たちは武田惣角や植芝盛平の合気柔術に強い関心をもって稽古していた。脇差しか身に帯びない將軍や上級武士を対象とした柳生新陰流が小刀操作を重視したように、普段は刀を身に帯びない海軍の将校たちは、護身術の必要から剣術より体術に興味を持ったのである。新陰流に対する関心も純粋に剣術に対する興味以上に、合気柔術の体捌きは剣の体捌きが元になっているためであったようである。竹下勇海軍大將は合気柔術を熱心に稽古し、膨大な研究資料を残しているが、新陰流は「一刀両段」だけでいいと言っていたといわれている。

昭和十年四月に日比谷公会堂で開催された日本古武道振興会主催の「流祖祭」の目録によると竹下勇は大東流で出ており、新陰流は「下條小三郎・浅野正恭」、「大坪元治・小南英一郎」の二組が演武している。当時、下條小三郎は海軍中佐、浅野正恭は海軍中将、竹下勇は海軍大将であった。三人は同期であったが、下條は上官を殴ったために出世出来なかったと、大坪先生は常に語っていた。しかし下條は武術においては先輩格であった。そのような環境の中で下條小三郎は新陰流を体捌きを重視したものに替えていったのではないだろうか。

以上はこの小論を書き始めた時の推測であったが、その後、私の推論を補強する資料を手にすることが出来た。

次の文は浅野海軍中将の弟で、植芝盛平と同様、大本教の幹部であった浅野和三郎が、昭和十年、雑誌『心霊と人生』に「隠れたる剣聖」と題して発表したものを、浅野中将が病床の下條を慰めるために、昭和十三年に「附記」を付けて転載したものである。

下條さんは現岡田総理の同期生で、今年は古稀に達した老年将校である。もはや頭髮も真っ白、眼もしょぼしょぼと霞んでいる。・・・会員の多くは下條さんを見てただ一介の好々爺と思っていたであろう。それ位下條さんはいかにも翁の面そっくりの外貌の所有者なのである。ところが豈^{あにはか}図らんや、この人が現在日本の有する恐らくたった一人の剣聖なのである・・・

と書き始め、柳生流の型から始められた新年の武道初めでの目撃談を載せている。

型が済んでから青少年併せて二、三十名の剣道試合と大東流の柔道の乱取りが行われた。大東流については言いたいこともあるが、それは暫

らく他の機会に譲ることにしよう。ただそれが柳生流の真髓を伝えた下條流と同じく世間並みの運動競技式の柔道とは全く選を異にすること丈附け加えて置く。

一と先ず稽古が終わって一同卓を並べて饗宴に移り浅酌の間に談は武術から心霊から精神修養にとしきりに花が咲いたのであるが、話ばかりでは埒^{らち}が明かないのがこの種の仕事である。下條さんはやおらその老軀を起こしていよいよ下條式の神技を実地に行ってみせてくれたのである。さア何所からでも打ち込んでみるよ、下條さんは羽織袴をつけたまままでとばけた格好をして道場の一端に歩み出る。相手を承わるは門下の優秀な一青年（大坪指方）、木刀を上段に振りかぶって隙をうかがっていたがエーツ裂帛^{れっぽく}の一声とともに飛鳥の如く切り込んで来た。アッ危ない、下條さんの白髪頭は真二つに割れて血煙^{ちけい}がさつと立ったと思いのほか、間一髪、真に間一髪の隙を以て下條さんの老体がぱつとかわされたと思う間もなくいつの間にか相手は畳の上に転がっている。手元か足元でもきかされたのであろうが、余りに迅^{はや}くて肉眼には分らない。

下條さんは不相変（あいかわらず）とばけた姿で微笑しながら、俺の肉眼はどうせ何も見えはしないのだ、背後からでも横からでも何所からでも勝手に打ち込んで見るよ、そう言つてそっぽを向いている。青年活氣の門下生達は口惜しがってあちらからもこちらからも熾（さかん）に打ちこむが、しょぼしょぼ眼の下條さんの体には何やら別製不思議な眼、心眼がついている。太刀風三寸どころか一寸ぐらいの差で、ひらりと太刀をかわしてしまえばかりでなく、必ず相手を倒すかひねるかして致命傷を興えないでは措^おかない。

それから又下條さんは木剣を執りて構えの姿勢をとる。相手も同じく木剣を執りて構える。やがて機熟して相手が鋭く切り込んで来る、が、

カチッと太刀が合った瞬間に、相手の太刀は左か右かへ流れ、下條さんの太刀はそのままスーッと相手の頭の真ん中に臨んでいる。三度五度幾度繰りかえしても同様である。つまり切り込んだが最後、相手はこのまま頭部を二つに割られて居るのである。

下條さんは仕合いの都度いろいろ説明する。今の打ち込みは曲がつて居たから駄目だ、今の太刀先きが二寸ばかり足りなかった、切り込む前から切り込むぞといふ色を見せているからいけない、丹田が空っぽになつていたからだめだ。いろいろ講評を下して、どうだ判ったかというのだが、丁度碁の名人の講評と同様、聴くほうでは判ったようで判らないらしい。何れも、首をひねつてただ考え込む丈である。……

無刀で、木刀を持って打ち込んでくる門弟を次々と倒していく姿は植芝盛平を彷彿とさせ、下條伝の新陰流と合気柔術との結びつきを伺わせて興味深い。植芝盛平と下條小三郎との関係については現在研究中である。

私は現在、巖周伝を学び始めて、巖周伝の太刀捌きは修練を積まなければ身につかないことを実感している。またそこに巖周伝の面白さがあり、真に剣術の本流を学んでいるという充実感もある。

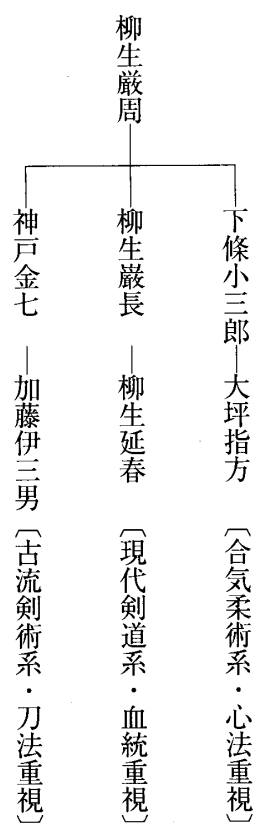
しかし下條伝をそのまま受け継いだ大坪伝の体捌きは、口伝を教わると「なるほど」と目を開かれるが、型を習得することはそれほど困難ではない。大坪先生は剣捌きについては、あまり細かいことは言われなかった。巖周伝の場合、相手の攻撃に対して斬られないために拳一つの幅しか体をかかわさないが、大坪伝では、相手の攻撃を避け、且つ素手で相手を制することの出来る間合いとして、身体半分、轉身することを原則としている。新陰流は転（まろばし）が極意であるといっても剣捌き中心であるので、やはり直線運動を重視している。したがって無刀の場合、新陰流の体捌きでは

剣のスピードに対しにくい。一方、合気柔術は素手で護身を目的としているので、剣や短剣などの武器を持ったものからの攻撃を避けるために、左右の入身轉身を重視した体裁きを眼目としている。それを下條小三郎が新陰流に取り入れたのではないだろうか。合気柔術の体捌きそのものが剣術の理合から生まれており、柳生新陰流、とくに江戸柳生は「無刀」を極意とするのであるから、下條としては、そのことで新陰流の本質を外れたとは思っていなかったであろう。大坪先生が常々、自分の新陰流は江戸柳生であると云い、「新陰流は体捌きである」と云っていた意味もそこにあるのではないか。

加藤先生も大坪伝の私の演武写真を見て、他の新陰流と比べて大坪伝はこの道場の遣い方と似ていると言われたが、共に巖周の高弟であった二人の伝の違いは以上のような理由があるからなのではないだろうか。

ただ、実際に両方を遣ってみた印象としては、スピード感と、体の軸を前後にぶらさない点、足を上げないでスルスルと歩むところは、他の伝と違って巖周伝と大坪伝は共通しているように思われる。

ここで新陰流を私の関心にしたがって分類してみたい。



この表は二十年にわたる私の新陰流研究の現在の到達点である。

ここで巖周に伝わった江戸時代の新陰流を、なぜ巖長がなぜ変えたのか

ということに対する私の考えを述べてみたい。

私はこれまでに何度も厳長伝を受け継いでいるといわれる師範の方々の新陰流の演武をビデオや各地の演武会で見学し、また武道雑誌などで演武写真を眼にしてきた。その結果抱いた疑問は、たとえば「三字円の太刀」の「一刀兩段」の尾張遣いである「合し打」に典型的に現れているように、太刀を構えるときに前かがみになることである。鎧を着た戦国時代末の型を伝える流祖時代に遣われた古伝の演武の場合には特に著しく前かがみになる。私の率直な疑問は、それでは鎧の重さで軋んでしまうのではないかということであった。

しかし春風館道場で、厳周伝の構えの特長が、両膝をゆるめて腰を沈める（エマス）が、身体は前後にぶれないことであることを知り、また千葉の吉田道場で厳長伝を学んでみて、厳長が厳周伝を変えた意味に思い至った。

厳周は江戸後期の一八四五年生まれであり、明治元年には二十三歳で、江戸時代以来の日本人の身体の使い方をしていたことは当然である。

農耕民族である日本人の身体の使い方は、田植えや草取り、稲刈りなど、すべてが中腰での作業である。中腰は腰を曲げるのではなく腰を落とすことによって生まれる。腰を曲げるとすぐ腰が痛くなり長い作業は出来ずに腰痛の原因となってしまう。そこで腰を曲げずに腰を落とすのである。最近出版された五木寛之『養生の実技』では日本人に適した運動として「膝は曲げる、腰は落とす」といい、農作業の例をあげている。

しかも、腰を落とすと同時に、膝をやわらかくゆるめているのだ。膝をゆるめる角度が深ければ深いほど、上体を曲げる角度が小さくてすむらしい。

農作業に限らず日本人は腰を落として膝をゆるめることを身体遣いの基本としてきた。このことを新陰流では「膝をエマス」と表現し、新陰流の身体操作の重要な要素としてきた。

尾張柳生三代・柳生利方によって書かれた「討太刀目録」は、初代兵庫助利嚴の遣い方を伝えているが、そこに「両膝恵末止（両膝をエマス）」とあり、『月の抄と尾張柳生』の「討太刀目録」の解説で、神戸金七は「えましと云うことは膝にちからをとることである」と説明している。また『柳生の芸能』中の「江戸柳生古目録口伝書による使い方」では「長短一味」の逆車の構えについて「手をもじり太刀先を左のつまさきへなして欠く心持にて身を下に沈むなり」とあり、それを神戸は「下に沈むとは股をひらき両膝をえまし低き姿勢になること」と説明している。

加藤先生は、膝をエマえますことで、どれほどの力が出るかを理解させるために車を持ち上げるときに使われる菱形のジャッキを道場に置いていた。後で述べるように「一刀兩段」の古伝や江戸遣い、尾張柳生の「一刀兩段」である「合し打」、「斬釘截鉄」の右肩上から真直ぐ右膝通りに切り下ろす太刀筋も、両腕をもじって打ち下ろす太刀筋も、正しくは全てが膝をエマスことによって成立している。

しかし厳長は明治二十四年生まれであり、当時の日本は小学校から徹底的にヨーロッパ近代の軍隊式の体育を教え込んでいた。

ヨーロッパ軍隊の身体操作は膝を曲げないで腰を伸ばすことが基本である。小学校からヨーロッパ的な身体操作を教え込まれた厳長が、日本的な身体操作を否定してヨーロッパ近代の身体操作が正しいとされた明治時代にあつて新陰流を遣うとなると、父の、膝をエマス日本の身体操作に反発し、新陰流を近代的身体操作に合うように改革したのは、むしろ当然であつたかもしれない。まして厳長は三十九歳で近衛師団の剣道師範となつて

いる。そこで厳長が膝をエマさないで太刀に力を与えるために考えたのが、上体を前にかがめて太刀を構え、腰の伸縮で打つ方法であったのではないか。大坪先生によると父・厳周は厳しく批判していたそうであるが、「天狗抄」一本目の「花車」で、腰を伸して片足でケンケンをするように打つ「くねり打ち」も、そう考えたと理解できるのである。しかしそれでは、身体の軸が前後にぶれてしまい、日本の武術の身体遣いではなくなってしまうのではないだろうか。

厳長は、厳周に高く評価され「明治年間の印可受得者中最高の地位の人」（杉田定一）といわれた下條小三郎と共に門下を出た大坪指方を、二十年後の昭和二十六年に尾張柳生の「控宗家^{ひかえそうけ}」としている。控宗家とすることは、ある意味では道統の後継者と認めたことである。しかし大坪はその後も厳長伝を伝えずに、私見によれば厳周伝を合気柔術の体裁きに合うように変えた下條伝の新陰流を伝えていく。

一方、父・厳長の後を継いで尾張柳生十二代宗家となられた延春氏の新陰流は、腰を伸ばして手首と足首のスナップを使つて、足を大きく振り上げて打ち込む点に特色がある。これは若くして宗家となられた延春氏を支えた高弟に剣道の高段者が多かったために、現代剣道の足遣いと「手の内」を新陰流に取り入れたためであると思われる。（ただ厳周伝でも、子供は足を前に踏み出せないで、子供には足を上げるように教えている。）

私見によれば厳長伝と延春伝の違いは、近代剣道と戦後スポーツとして始められた現代剣道との違いによると思われるが、目下、術理により研究中である。

近代的身体観や、それに基づく現代剣道が正しいという立場に立てば、厳長伝・延春伝も、新陰流の、時代に沿った改革であるといえる。しかし現代、近代的身体観が日本人に合わないのではないかという反省がなされ

ている。そこで江戸時代の日本人の身体の使い方が改めて見直されだしてきている。私が二十年前に合気柔術と大坪伝新陰流の手ほどきを受けた鶴山晃瑞先生が当時から既にナンバ歩き的重要性を指摘されていたように、江戸時代の身体操作は、初めは東洋体育の実践者や古武道の世界に限って話題とされていたが、甲野善紀氏の活躍などにより、スポーツ界や教育界、介護の世界などでも取り入れられるようになってきた。平成十七年三月二十九日の朝日新聞夕刊には資生堂スポーツビューティーコンサルタント松田千枝氏の話として、次のような談話が載っていた。

強い筋肉で上に伸び、体をひねることで力を出す西洋の走りとは対照的に、東洋の走りは、体のタテの軸を基本に、地についた動きなんです。

現在私が厳周伝新陰流として習っている歩き方も、まさに体の軸を前後左右にぶらすことなく、腰を沈め、風を孕^{はら}んだ帆船がスルスルと走るような「風帆の位^{ふうはん}」の歩みなのである。明治時代に輸入された身体操作にたくなに背を向けて、江戸時代のままの新陰流を守り続けた厳周伝新陰流の現代的意味が見直されなければならない。

以上は、日本人の身体観が、江戸時代以降どのように変遷してきたのかを研究テーマとしている私の、現在の時点での試論である。各方面の方々の忌憚ない御意見を頂きたいと思っている。

ともかく私が捜し求めていた江戸時代の新陰流の技が厳周伝として残っていたということを知った今では、厳周伝を正確に習得することに全力を尽くしたい。近代化の影響を受けていない江戸時代の身体使いをしている厳周伝を正しく習得し、そのまま後世に伝えることは、近代的身体観が疑問になった現代、日本人の新しい身体観を模索するために重要であると思うからである。

まず神戸金七編『柳生の芸能』の「序」によつて巖周伝の精神を見てみよう。

「形と云ふこと」では「形」とは「死物」ではなく「勢」であり、「勢々変化して勝ちを取る法を習う、基本の姿」であり「一刀兩段の形も一刀兩段の勢あるがゆえに一刀兩段と名付けたるなり」として次のように記す。

初学、形の名の義（意味）を尋ねんと欲せば、「勢」という字にかえて見るべし。常に「形」というに従いて義を失うことなかれ。本来「形」というは定まりたる「形」なり。「勢」というは運動の義あり。さてまた「形」は情のあらわれたるものを云い、心に何とかせんと思いたるところ、外へ現われ見えたるところより負けとなるなり。故に形ちの見えたるを悪しとし、何とも察し測られぬところを好しとす。もと（元々）兵は「無常形無常勢」と云えり。

当流の先哲もみな「無形」をもつて本体とせり。「活人刀」「没茲味手段」すなわち「無形の位」なり。されどもそれにては一定したる指針なし。指針なくては修行困難なるにより、仮に種々勝利の形ちを挙げて勝を制する道を現わし示したるなり。

『柳生の芸能』は続けて、「形一通り修行鍛錬の上は、試合により勝負の道を究め、自流はもとより、他流の人々とも試合し、打って打たれ、その破れたる原因をよく会得し、もつて切磋琢磨の功を積み、形を忘れて形を使い、始めて生きた「勢」を心悟しなければならぬ」と言う。「形」が生きたものになるために他流試合を奨励していることに現代の古武道家は真剣に耳を傾けなければならない。

柳生新陰流の刀法の基本について初めに加藤先生に教授いただいたことを『柳生の芸能』も参考にして私なりにまとめると次のようになる。

流儀の口伝

- 一 足腰で打つ。手はつけたたり。
- 一 肩腕（かたかいな）で切る。手首は動かさない。龍の口
- 一 腰を浮かさない。流儀で一番嫌うことは腰が浮くこと。
- 一 つま先は常に上げ、踵（かかと）を上げない。

○「足腰で打つ。手はつけたたり」について

加藤先生の「一刀兩段」の車（しや）（二〇頁）からの斜めの斬りの速さは目を見張るものがあつた。それでいて足腰を廻すだけで腕の筋肉の動きは全く見られず、全体の印象としてはスピードは感じられず静かな動きで、背中をさわってみると打ち終るまで同じ速さであることが分かる。

○「肩腕（かたかいな）で斬る。手首はうごかさない」について

人差し指と親指の間を「龍の口」といい、ここを広げて刀を握る「手の内」を「龍の口」と呼ぶ。太刀や木刀、竹刀を持つときは、「龍の口」を広げてやわらかくしつかりと握り、いったん太刀を握ったら手首をまげないでそのまま振り上げ振り降ろさなければいけない。剣道のように、手首のスナップを利かせるために木刀や竹刀を小指、薬指以外は緩めて持つと、打ち合ったときに、その緩みを打たれてしまうことになる。

神戸先生は、近頃の人は「太刀を持つすべすら知らぬ。太刀の持ち方がダメだったら、この流儀はダメだよ」と常々言っていたということである。剣道ですつとこれた人は、手首がいけないと言つても直らないし、またスナップを利かせるのが剣道の特長であつて、それが剣道の勝ち口の一つに入るの、直そうとせず、かえつてその手首を生かして新陰流をやり、それを後に伝えるために、新陰流が変わつてきてしまうのだと言われた。

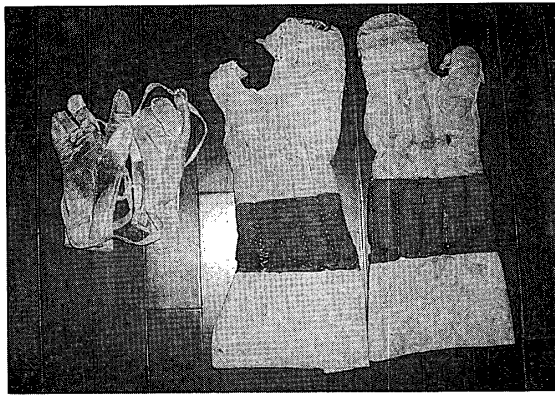
結局、新陰流を正しく習得するには、剣道の「手の内」を捨てることが

鍵になりそうである。ただ、新陰流を先に習得してから剣道をやる場合は問題がないと神戸先生は言っておられたとのことである。四回目の稽古から新陰流「抜刀」^{ばっとう}の稽古を始めたが、「抜刀」でも当然、手首のスナップは使わなかった。加藤先生の抜刀も全く手首の力やスナップを使わず足腰の動きだけで抜いているので、刀は自然に打太刀が太刀を振り上げた手首にとどいているという印象である。

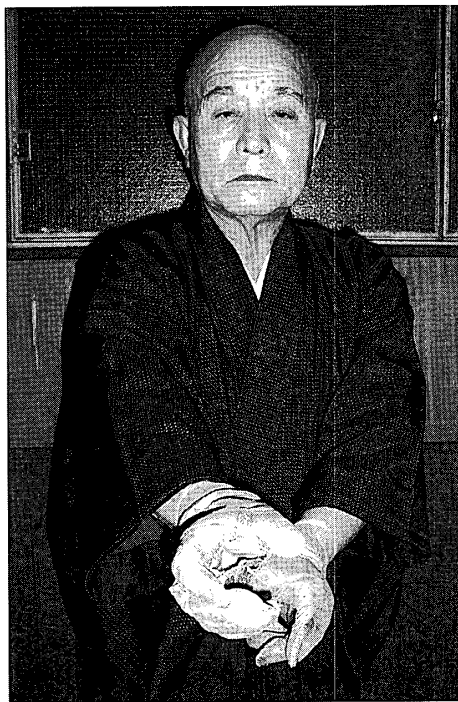
この「手の内」を神戸先生は「流儀の手」であると盛んに言われていたそうである。そして、もしこの手の内を教えるんだったらこれを見せよと言って、巖周が一生使ったユカケを桐の箱に入れて残された。拝見すると、この手袋をはめると自然と流儀の手となるほど使い込まれていた。

○「腰を浮かさない」について

「流儀の手」は「龍の口」でなるのに対して、「流儀の足」ともいうべきものは「つま先は常に上げ、踵^{かかと}を上げない」ことであると言える。神戸先生



新陰流の「手の内」を教えるのだったらこれを見せよと言って神戸先生が残された、巖周先生が一生使われたユカケと小手。これを手に着けると自然と「流儀の手」になる。



巖周のユカケを着けた加藤先生

生は「この流儀は踵があがったら絶対駄目だ。踵が上がらない稽古をしなさい」と盛んに言っておられたそうである。しかし踵が上がらないだけでは駄目で、同時につま先を上げなければ流儀の足とはならないとのことである。踵を着けてつま先を上げ、風をはらんだ帆船がスルスルと波の上を走るように歩む新陰流の足運びを「風帆の位」^{ふうはん}という。

高校生の時、宮本武蔵の『五輪書』で「常に歩むがごとし」「踵を踏め」の二つの教えを知って以来、踵を踏むことの大切さは自覚していた。現代剣道を続けながらも、いつもこの点が気にかかって剣道の稽古にうちこむことは出来ないでいた。後に私が合気柔術と「大坪伝・新陰流」を教えていただいた鶴山先生は常に踵をあげないこと、ナンバ歩きするようにと注意され、私の稽古会でもナンバ歩きと踵を上げないことに常に注意を促していた。しかし踵を上げないことは「つま先を常に上げる」とことと連動して行われなければ十分に効果的ではないことを加藤先生の教示によって始めて知った。



加藤先生の「龍の口」

新陰流の足運びは能楽の金春流との技術交流によって新陰流の大事となつたことは知識としては知っていたが、つま先を上げることが踵を上げないことと連動していることには気が付かなかった。

つま先を床に着けていれば、たとえ踵を上げないようにしていても、打ち込むときは、結果としてつま先に力が入り、踵が床に着いていたとしても、踵にかかる重心が浮いてしまっているのである。それでは結局、腰が浮いてしまうことになるのである。私の課題の一つである「合し打」の成り立つ理論的根拠も、踵を踏み、つま先を上げ、膝をエマして「足腰」で打つことにあることが分かった。

これまで見過ごしていたが、つま先を上げることは『五輪書』で武蔵が「足使いのこと」で述べていたことであつた。

足のはこびようのこと、つま先を少しうけて（うかせて）きびすを強く踏むべし。足づかいは、ことによりて大小、遅速はありとも、常に歩むがごとし。……

武蔵について書物（『宮本武蔵を哲学する―柳生の剣・武蔵の剣』南窓社）も書き、『五輪書』は何度も眼を通していたのに、春風館に来るまでつま先を上げることの重要さに気が付かなかったのである。

初回の門弟の方との稽古で完全に「合し打」で打ち負けたことで、かえって「合し打」への展望が開けた。これからのくらしい稽古で「合し打」が身につくか楽しみである。加藤先生の話では、新陰流がどの程度身についているかどうかは「合し打」をやってみれば分かると神戸先生が語っていたとのことである。

以下に私は教えを受けたことを元に「厳周伝・刀法」の術理書を作成してみよう。「術理書」は本来、術理を十分に習得した者が著わすのが筋であるが、私は「大坪伝・新陰流」の術理書を書いており、「厳周伝」を初

歩から学ぶといっても新陰流の初心者ではないので、「厳周伝」を学びながら大坪伝や他の伝と比較して考察することが可能である。また『柳生の芸能』『月之抄と尾張柳生』の中に「江戸柳生古目録口伝書」「新陰流討太刀目録」「流祖時代、上泉子、石舟斎子の使い方」いわゆる「古伝」が収録されており大変参考になる。

これらを元に「厳周伝」を学ぶ過程で受ける加藤先生や高弟の方々の指導、私の「気づき」も書き込んでいけば、「厳周伝」習得の道筋を見つけることが出来るので、完成した「術理書」とは違った角度からの「術理書」が作成できるかも知れない。

最初に「三学円の太刀」を取り上げる。「三学円の太刀」は上泉伊勢守が新陰流を創流したときの最も基本となる勢法であり極意でもある。神戸先生は「三学円の太刀」をしっかりとやれば充分であると言っていたそうである。私もこの八ヶ月の間、「三学円の太刀」を中心に繰り返し稽古を続けており、その度に新たな発見があり、「三学円の太刀」の奥の深さに驚いている。

春風館には「三学円の太刀」の遣い方として四通り伝えられている。

一つは「古伝」である。新陰流を創始した上泉信綱の時代の遣い方であり、戦国時代の、鎧を身に付けた場合の遣い方である。「古伝」こそが新陰流の本流ともいえるべき「本伝」である。

二つ目は「江戸遣い」であり、江戸柳生の祖である宗矩や十兵衛の遣い方である。「古伝」とあまり本質的な違いはないが、膝を「古伝」ほどはエマさない遣いかたである。江戸柳生は幕末に至るまでこの遣い方を伝えている。尾張柳生の祖である兵庫助もこの遣い方をしていた。

三つ目は「尾張遣い」で、尾張柳生三代の連也が考案した遣い方である。その一本目の「一刀両段」と五本目の「長短一味」は相手が真っ向から面

を打ってくるのに対し、真つ向から打ち勝つ、いわゆる「合し打」であり、尾張遣いの特徴とされる。なぜ尾張柳生の連也が兵庫助や江戸柳生と違った「一刀両段」を創案したのかは難しい問題を含んでいる。江戸時代になつて鎧を着用しなくなり、正面から頭を打つことが可能になったので、兵庫助の「直立たる身」に合わせて連也が「合し打」を創案したという通説は正しくはないのではないか。加藤先生は、古伝や江戸柳生の「一刀両段」を遣えば「合し打」でなくとも真直ぐの打ちに勝つことが出来ると言われている。この問題に対して千葉の吉田師範は、將軍家の兵法師範である江戸柳生家に遠慮して新陰流の勢法の一本目である「一刀両段」の遣い方を変えたのではないかという説を出されている。今後の研究課題としたい。

四つ目は「太太刀」であり、古伝と同じ頃のものと思われる。

春風館には以上、「三学円の太刀」として四つの遣い方が遺されている。ここでは江戸遣いと尾張遣いを中心に検討し、古伝の遣い方については最後に簡単に触れたい。なお「三学円の太刀」五本のそれぞれの太刀には「砕き」といわれる変化の技があるが、その多くは秘伝とされているものであるので、ここではそれがどのような意義を持ったものであるかを検討するために、加藤先生に特にお許しを頂いて、「長短一味」の砕きを一つだけ取り上げたい。

ただあらかじめ明記しておきたいことは、新陰流では型と言わずに勢法せいほうということの重要性である。型通り遣うことが正しいのではなく、剣術とはあくまで相手に勝つことを目的としているのであり、勝ち口を示して生きている動作であれば、示された形にこだわり過ぎる必要はない。たとえば打太刀が打ち負けて後ろに退がり、撥草はっそうに構えるのを、使太刀は詰めよつて「二の斬り」の太刀を打太刀の鬢びんの横から右目（使太刀から見ても左目）に付けるのであるが、打太刀の退がり具合や撥草の構え方によつては、勝

ち口を示すためには左目につけたり顔の真ん中に付けるほうが理に適う場合がある。

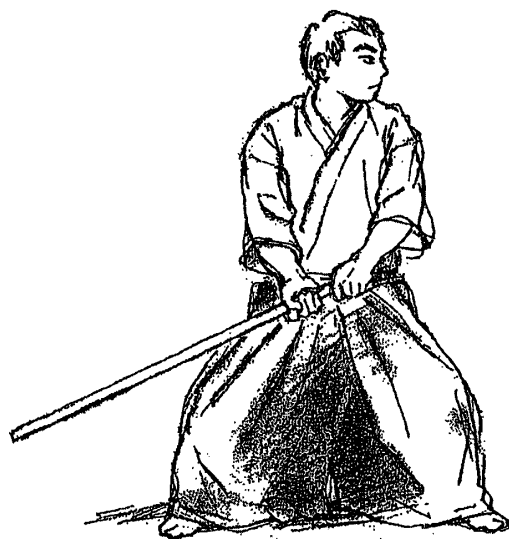
さらに注意しなければいけないことは、勢法を図示した場合、動作が一瞬、静止するかのような印象をうけるが、すべての動きが打太刀と使太刀の斬り合いの「道中」であり、固定し、静止したところはどこもないということである。神戸先生も常々分解してはいけないと言われていたのととであり、加藤先生は「一拍子の打ち」「二巡りの打ち」をするようにと常に注意をされている。加藤先生も写真やイラストはあまり好まれないが、研究のために敢えて黙認いただいた次第である。

イラストレイターの佐藤まき子さんには、私の下絵の他に高弟の方のビデオにより、また春風館道場で演武を見ていただき、さらに電話やファックスで何度もやり取りをして素晴らしいイラストを仕上げていただいた。東京芸術大学の日本画科を出られ、高校時代には剣道の経験もあり、現在は空手をやられ、日本人の武術の身体遣いに精通されている佐藤さんならではのイラストにより、二年後には江戸武士の遣ったままの新陰流の全貌を研究・紹介する一般書『新陰流を学ぼう』を上梓したい。

「二刀両段」車の構え

古伝（本伝）

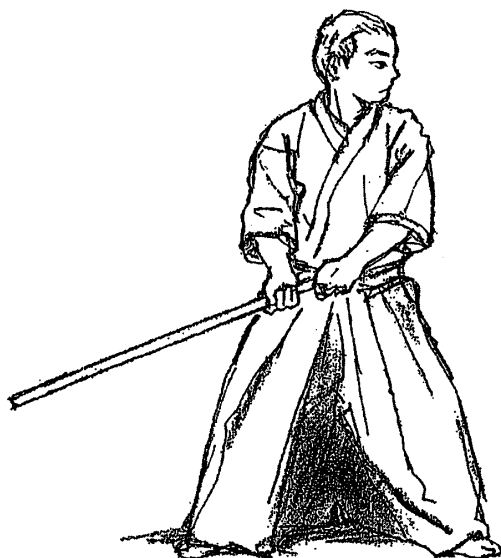
「沈^{ちん}なる身」



膝^{ひざ}を大きくエマす。

◎エマす―腰を垂直に沈め、膝に力をとる（バネを利かせる）

江戸遣^{づか}い



膝をエマす。

尾張遣^{づか}い

「直立^{つつたつ}たる身」



自然に立つ

（膝を伸ばし過ぎない。

わずかにエマしている）

一刀両段・江戸遣い

打太刀 太刀を下段に下げた無形の構えから青岸に上げ出し、使太刀が車に構えるのに応じて太刀先を肘から肩の間に付けて攻め進む。

使太刀 打太刀が太刀を上げるに依じて無形の構えから後ろの左足を右足に揃えてから右足を大きく後ろに引いて車に構え、待つ。

○両足踵は打太刀に対する一直線上になる。左足の向きはその直線上より三〇度ほど内側、右足の向きは四十五度ほど内側になり両膝をエマす。左手は身体に対し三〇度ほど前に出し肘を伸ばす。右手は四十五度ほど前に出す。★角度は全て私の一応の目安である。

打太刀 攻め進んで間に入るや右足を踏み込んで使太刀の肩をやや斜めに切りかかる。

使太刀 応じて足腰を廻して右の肩を入れかけ、打太刀の拳または柄中（小手を着けていない場合は鍔元近く）を打つ。（十文字と勝つ）

基本（初学者）の打ち

太刀を車から肩の高さまで取り上げ切り下ろす。右足をやや右斜め前に踏み出すと打ちやすい。

本来の打ち

いったん取り上げないで車からそのまま切り上げる。足の位置もそのまま、踵を使って腰をまわし、足腰の力で打つ。「一調子に勝つ」

○この時、腰がぐいと前になる。打った結果として体勢はやや前傾しており、左拳は左腰の前側にあり左肘は伸びている。剣先は打太刀の右目に付いている。

○左肘は縮みがちなので意識して伸ばすが、伸びすぎはいけない。剣先を右目に付けるのは目安である。両足は踵で廻る。打った瞬間、打つ時に緩めた右足のエビラ（膝の後ろ）を張る。

○以下の「二の斬り」は江戸遣い、尾張遣いとも「一刀両段」「斬釘截鉄」「半開半向」に共通である。

使太刀 前の左足で一步攻め、

打太刀 それにつれて後ろの左足から一步退がる。《継ぐ足》

打太刀 攻められて、ゆっくり左足から右斜め後ろに撥草に引く。

○そのまま撥草に執らないで、後ろに引きながら、使太刀に打ち込まれないように太刀を油断なく顔の前に上げてから撥草に執る。（柄中が右の頬の前、剣先はやや斜め後ろ、両肘はあまり上げず、足は八の字の逆に開き、両膝をエマす。使太刀に隙があれば直ちに打ち込めるように、打太刀に対して腰を入れて構え、太刀を持つ手を緩めない）

○引く足については伝書や口伝になく自由であるが、目安としては、左足をやや右斜めに引き、さらに右足を左足の右斜め後方に大きく「隅かけて」引く。

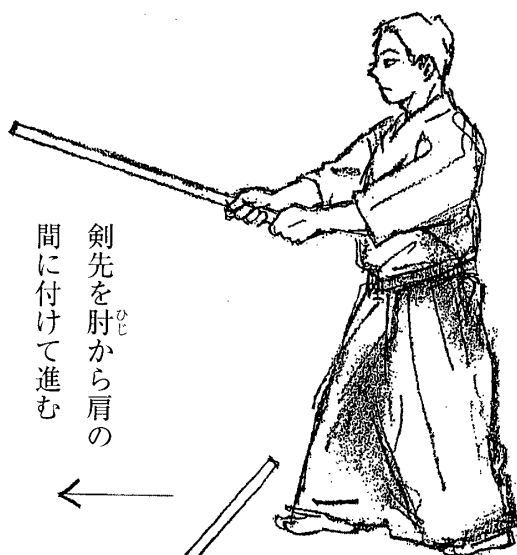
使太刀

打太刀が斜め後ろに引くのに依じて、打太刀の動きに連れ従うように太刀先を打太刀の顔の前に付けながら隙をみせずにつくくり上げ、左足、右足と打太刀を勝ち詰め、打太刀の鬘を斜めに切る心持で太刀をゆつくりと廻しながら、左足を右足の斜め後ろに引き、太刀先を打太刀の右目に付ける。《詰める足》

○最後に使太刀が打太刀の右目に剣先を付けるのは、一応の目安であり、要は打太刀から左拳が見えない位置である。

◎「二の斬り」の全ての動作において打太刀も使太刀も勝ち口を崩さない。

一刀両段（江戸遣い）



剣先を肘から肩の
間に付けて進む

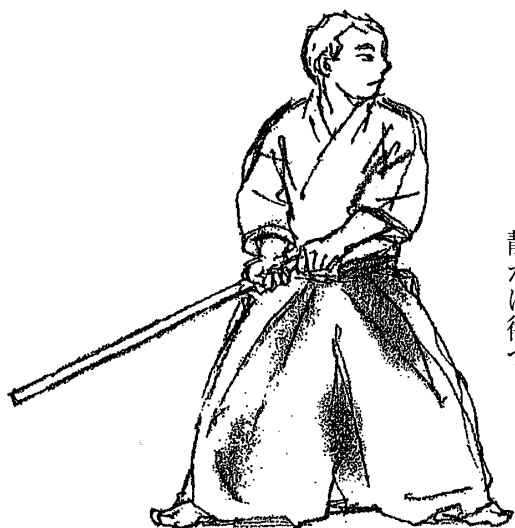
肩越しに見る

両膝をエマす

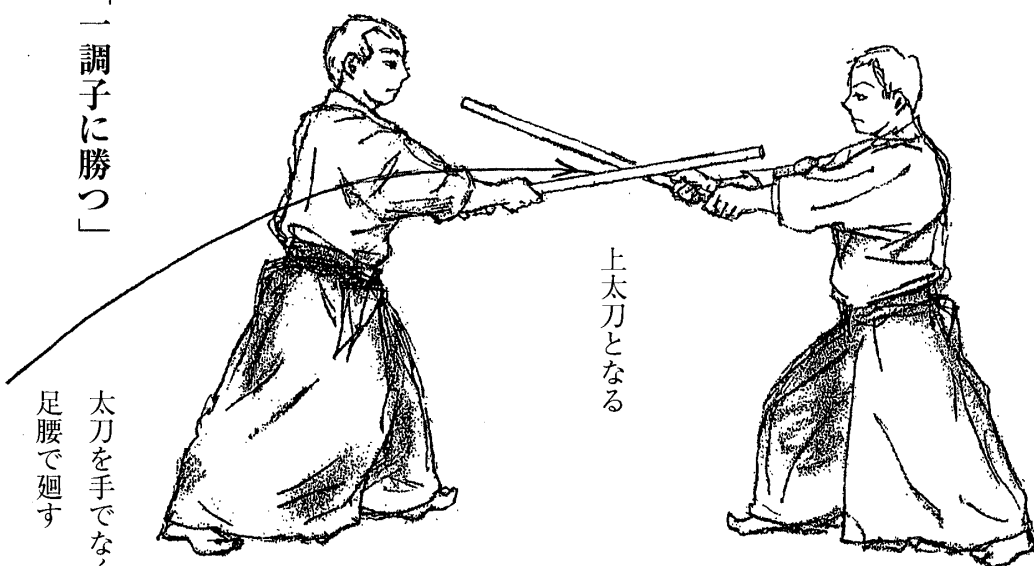


肩を斜めに打っていく

◎足元の矢印は次図への動きを示す
◎全ての動作において足の指先を上げるように心がける



静かに待つ



上太刀となる

「二調子に勝つ」

太刀を手でなく
足腰で廻す

二の斬り（継ぐ足・詰める足）

◎「一刀両段」「斬釘截鉄」「半開半開」に共通
但し「継ぐ足」は前に出ている足から進む

「継ぐ足」



（先）左足で一步
攻める

（後）攻められて一步退く



すみ
隅かけて
はっさう
撥草に退く

びん
鬢の横を斬っていく

「互いに縁を切らない」

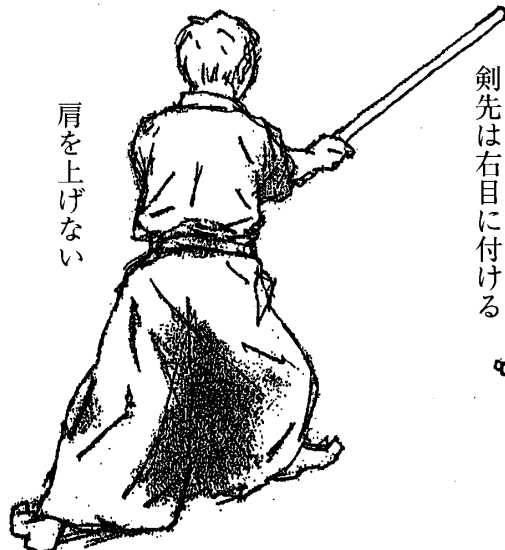


「詰める足」



剣先は右目に付ける

肩を上げない



◎「二の斬り」で太刀をゆっくり廻すのは、残心を示すため、また初学者の場合は太刀筋を覚えるためであり、本当のところは隙を見せずに素早く斬る。

一刀兩段（尾張遣い・合し打）

打太刀 無形の構えから太刀を青岸に上げ出し、使太刀が車に構えるのに応じて剣先を使太刀の肘から肩の間に付ける。

使太刀 打太刀が太刀を上げるに依じて無形の構えから後ろの左足を半歩前、前の右足を半歩後ろに引いて車に構え、待つ。

○一応の目安として両足幅は肩幅、背が低い人は足のばねを使うために足幅を広くとることもある。

○両手でしっかりと竹刀を握り、打つ時も打った後も握った力を緩めず、「手の内」を変えない。

打太刀 攻め進んで間に入るや、

基本（初心者）の打ち

後ろの左足を右足に引きつけ太刀を取り上げ、右足を踏み込んで真つ向に使太刀の頭を打つ。

○いったん取り上げるのは、使太刀に間を覚えさせるためである。

○打ち負けた太刀は使太刀の左側頭部から肩の辺りに止まる。（目安）

本来の打ち

いったん取り上げないで右の動作を一拍子で行なう。

使太刀 打太刀が打ってくるのに依じて足腰を廻して太刀をひつかぶるように雷刀に上げ①、（後ろの右足を左足に引き付け、前の左足を僅かに引く②。左足のつま先はやや正面の左を向く）、左足を踏み込んで（右足は継ぎ足・間合いによっては踏み込まずに）、剣先から打太刀の頭に切り下ろし、合し打に勝つ③。《打つ足》

①雷刀に上げるときは、左拳を右肩斜め後ろから「天に突き上げ

るように」（下村氏）してひつかぶる。そのとき体の軸が前後にぶれないようにする。ひつかぶって打つまで止まる瞬間はない。

②両足を引き付けるのは間合いを変えないためである。

③合し打に打つときは肩の力を抜いて、足腰を使って剣先を効かせて打つ。打った瞬間、左手を伸ばす。打ちきった左手の位置は水落ちとヘソの中間の高さ（目安）である。ポンとたたかないで、同じ速さでズンと沈むように打つ。

○使太刀の動作は一つ一つ区切らないで、一連の動きの中で行うことが肝要である。「一調子に勝つ」「二廻りの打ち」

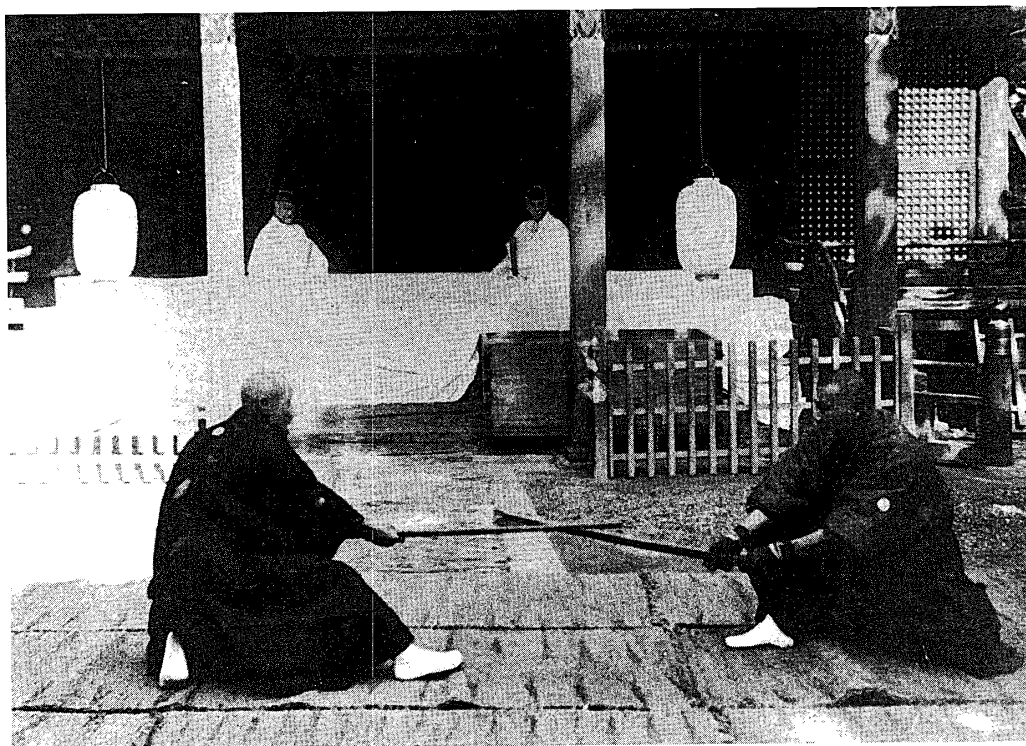
「二の斬り」は江戸遣いと同じである。



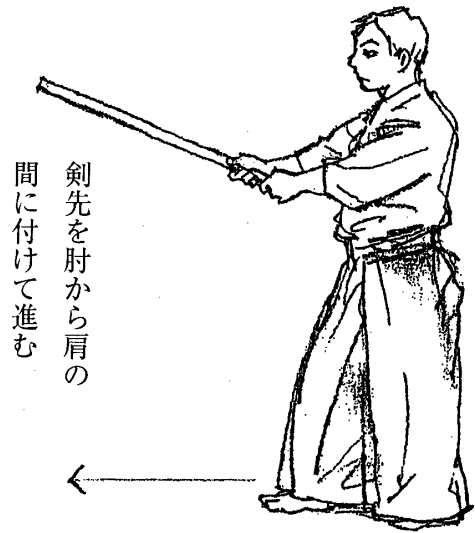
加藤館長

「二刀両段」「燕飛」を演武する柳生嚴周と柳生忠三

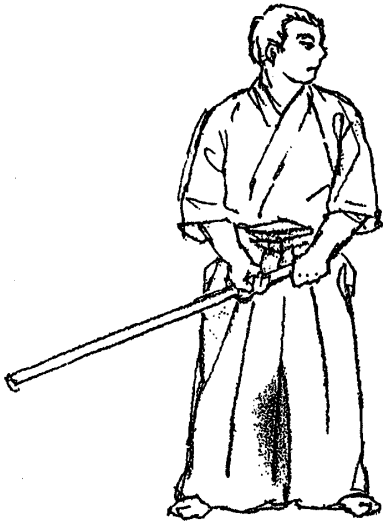
写真の裏には「御召しに依り宮内省濟寧館道場に出仕を前にしての奉納仕合 右 柳生嚴周 左 柳生忠三 大正二年二月七日」とある。



一刀兩段（尾張遣い）



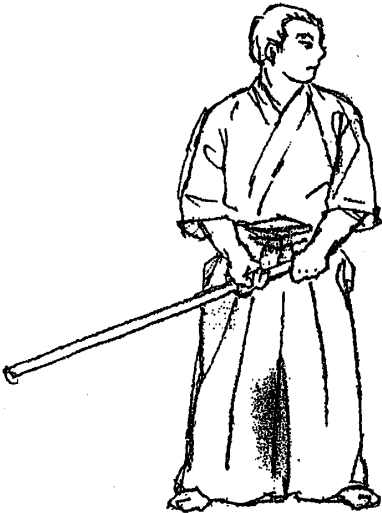
剣先を肘から肩の間に付けて進む



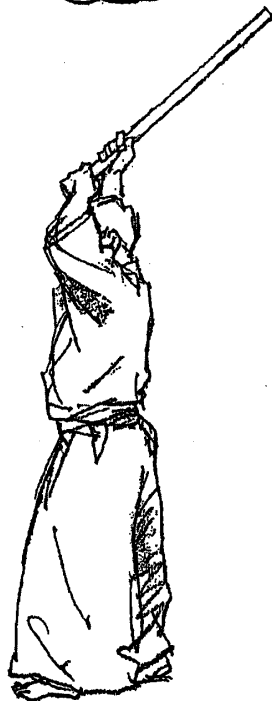
「直立ちの位」で構える



真つ向に面を打っていく

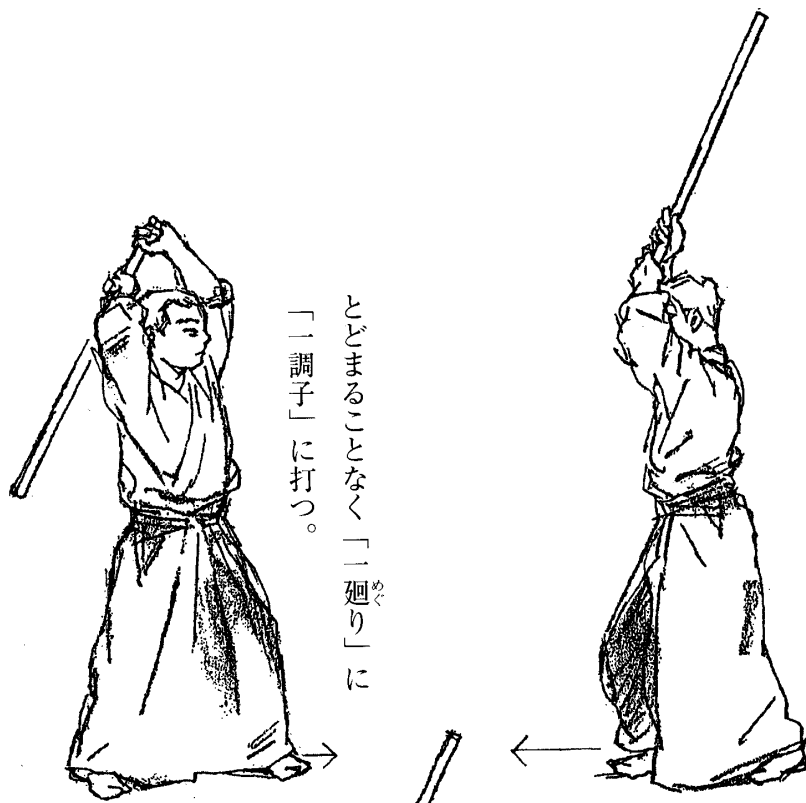


静かに待つ

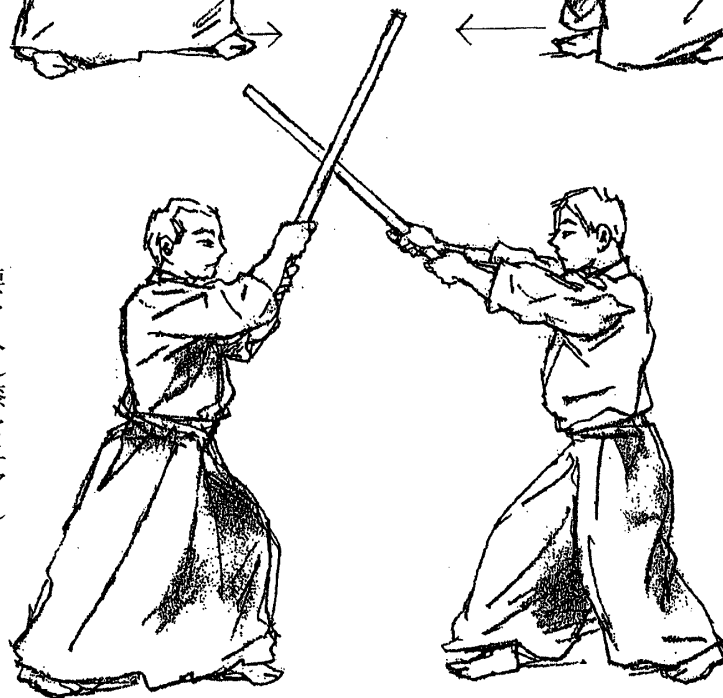


ひつかぶるように太刀を後ろに廻して

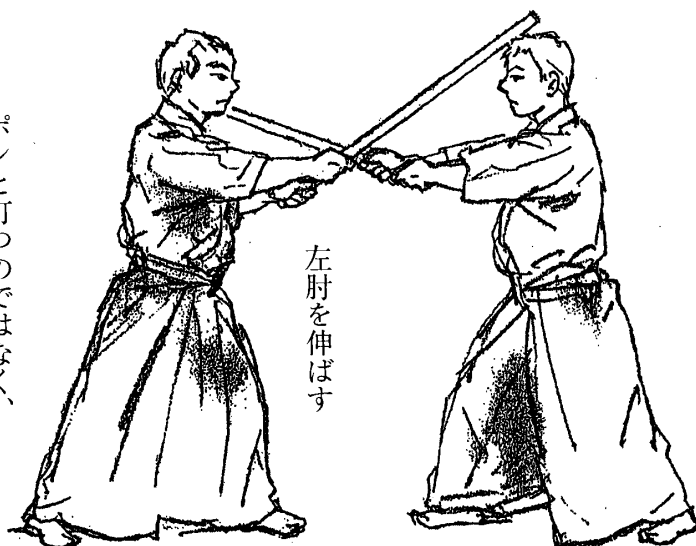




とどまることなく「二廻り」に
「二調子」に打つ。



腰を入れ膝をエマシ
足指を上げ「後の先」で
肘が伸びていないことが
「勝ち口」である



左肘を伸ばす
ポンと打つのではなく、
同じ速さで
ズンと沈んで打つ

私の問題点

使太刀の場合

- 一、勝とう、勝とうというところが手に出ているのが問題。それが足腰にでなければならぬ。
- 一、打つとき肩から出て腰が出ていない。肩からではなく足から廻す。
- 一、前足ではなく、後ろ足の踵で廻す。
- 一、打つとき、手をしっかり前に出す。左の肘を伸ばす。但し伸ばしすぎてはいけない。伝書に「左の肘を伸ばすこと」とあるが、これは左肘は縮みがちなのでそうあるとのことである。
- 一、打った後、前足の膝はゆるんで、身体は少し前傾にならない。後ろ足のエビラ（膝の後ろ）を張る。
- 一、剣道のように手首のスナップを利かせない。手はつけたり。
- 一、拳から出て剣先が遅れる。手で打っているからで、足腰で打たなければ本当の合し打はできない。

打太刀の場合

- 一、打たれて退がる場合、剣先が相手と対話していない。打太刀は使太刀の引き立て役。相手の動きを見て、使太刀の詰める太刀に合わせて太刀をゆっくり上げながら退がる。（連れ拍子）

加藤先生講話

○「三学円の太刀」で一番大事なのは、打太刀は絶対打たれぬところで退がっていく。それに対して使太刀も絶対打たれぬところで付いていく。一本の糸を張って、その糸がたるまぬように使う。これが本来の三学、兵法の一番大事なところ。連れ拍子ということ。

江戸遣いの「一刀両段」と尾張遣いの「合し打」について

「合し打」は、尾張柳生第三代の柳生連也斎が、初代・兵庫助利厳の直立たる位に合わせて創始したといわれる勢法であって、兵庫助は上泉信綱、柳生石舟斎と同様、前述の江戸の「一刀両段」の勢法を遣っていた。

尾張のやり方である「ひつかぶせ」はお互いに頭を打ち合うから「合し打」で勝てる。しかし相手が斜めにきたら、相打ちは出来るが、「合し打」では負けてしまう。

本来、使太刀が「車」に構えた場合、打太刀は前に出ている肩か首を斜めに斬ってくる。そこを古伝や江戸遣いの「一刀両段」のように使太刀が拳を車から切り上げる。実戦の場合は首を斜めに切ることも出来る。素手の稽古の場合は袋竹刀の手元を打つのが一般的だが、小手をつけた稽古では拳か柄中を打つ。加藤先生は、車からの正しい打ちが出来れば、相手が頭を真直ぐ切ってきた場合でも勝つことが出来ると言われた。

春風館以外の道場では、いったん車から斜め横に取り上げてから打ち下ろしているようである。春風館道場でも初心者の方は同じように取り上げるが、本来の「一刀両段」は違うといい、次のように話された。

○（打太刀が使太刀の肩を斬ってきたのに対して、使太刀が打太刀の拳を車から切る場合）絶対にいったん太刀を上げてから切り下ろしてはいけない。それでは遅れてしまう。「一刀両段」についてこの道場の一番肝心なところを教えるとそうなる。新陰流は「一刀両段に始まって一刀両段に終わる」ということはこのこと。これは新陰流の、他のどこの道場でもやっていない。

神戸先生も、取り上げない本来の打ち方は修得が困難なので、長いこと教えに行っていた精勇館道場でも、いったん肩の高さまで取り上げて

から打つ仕方を教え、この道場でも始めのうちは同じように指導されていたが、このままでは本来の仕方が失伝されてしまうということで、晩年になって初めて本当の打ちを教えられた。本当のところを身につけるのはなかなか大変だけれども、その理論はしっかり覚えてほしい。

○「一刀両段」は、尾張柳生では、打太刀が面を真直ぐ打つてくるところを、使太刀が、それに応じて真直ぐ打つことで、使太刀の太刀が上太刀になって勝つ「合し打」の技として遣われる。

神戸先生は新陰流がどれだけ身につけているかは、お互いに「合し打」をやらせてみれば分かるといわれていた。（最近私は、巖周先生が亡くなった後、「合し打」が本当に出来たのは神戸先生だけであったという話を大坪先生系統の武道家から聞いた。）

考察

私が受け継いでいる新陰流は大坪伝で、体捌き中心の稽古であったので、それほど真剣に「合し打」の練習をしたことがなく、一刀流の切り落とし（江戸後期以降の、打太刀が打ってくる太刀を少し遅れて真直ぐに切り落とす刀法。春風館道場以外の合し打もこの斬り落としと思われる。本来の切り落しは、打太刀が切り込んできた太刀を、使太刀が太刀を手前に車に廻して受け流すことで、切り込んできた打太刀の太刀が切り落ちることである）で間に合わせていた。そこで春風館道場で「合し打」をやってみて、完全に打たれてしまった。

春風館道場で私は始めて「合し打」が成り立つ理論的根拠を知った。

一、袋竹刀を単に上段に上げるだけでなく、雷刀らいとう、すなわち左拳を額より前に出さなくて高く正しく上げる。そこから剣先を効かせて打ち下ろすこと。剣先と拳が同時に出来ないければ合し打は成り立たない。

一、そのためには手首を使わないで肩腕かたかいなを使って太刀を大きく振り落とすこと。これが剣道を長くやっている者には一番難しい。そこで切り落しで間に合わせてしまうのであるが、剣道のように手首のスナップを使って打とうとすると、その一瞬、剣先が遅れてしまい、正しい握り方をして打ってくる相手の太刀に乗られてしまう。

一、その際、腰が浮かないこと。

そのためには踵かかとをつけ、足の指先をあげることに。そうしないと打ち込むときに踵が浮いてしまう（つま先を上げなくても踵がついているので、外からは踵が浮いてしまうことは見えない）。

一、以上の刀法上の留意点と同時に、心法上、重要なことは、「一刀両段」は「待たいの位」であるが、宗矩が「身は待ち、心は懸かり」というように、「先せん」の気持ちで待つていなければ打太刀の攻撃に大きく遅れてしまうことである。「先」の気持ちで待つていれば、打太刀の攻撃の起こりを読み、打つてくると同時に車から取り上げて迎え打つことが出来るのであり、車から取り上げるといふ僅かな遅れが、かえって「勝ち口」となって使太刀の頭上近くに迫った打太刀の太刀に乗って弾き飛ばすことが出来るのである。

◎私の場合、自分では正しく打ち下ろしていると思って竹刀が合わさった瞬間、相手の竹刀にこちらの竹刀を押し当てて打ち勝とうとしている。それを理解させるために高弟が自分の竹刀を当てる直前に外すと、私の竹刀は打太刀の頭をそれていることが分かった。「合し打」に正しく負ければ、こちらの竹刀がはじかれることが分かった。

斬釘截鉄（ざんていせつてつ）

打太刀・使太刀 中段直勢（一文字の太刀）で高く（右手は肩の高さ）構える。

打太刀 右足を出すと同時に撥草^{はっそう}になり、間に入るや使太刀の太刀中^{たちなか}（尾張遣いは左拳^{こがし}）を打ち砕くように打つ。①

使太刀 「江戸遣い」

拳をわずかに右に回して打太刀の太刀を、太刀の刃で当たり拍子を受けて右斜め下に受け流し、太刀を右肩の横で廻し②、

「尾張遣い」

打太刀の打つて来ようとする気を制し、素早く太刀を右肩の横で廻して（越す拍子）打太刀の打ちを抜き②、

基本（初心者）の打ち

太刀を真つ向に③引被つて④取り上げ、右肩を入れて一重身^{ひとえみ}になつて、太刀を右膝の線に真直ぐに振り下ろして⑤右拳を打つ⑥。

本来の打ち

太刀を、「真つ向に」ではなく「右肩線上に」⑦引被つて打つ。

すぐさま左肩を入れかけ右半身になりながら⑧、剣先を使って打太刀の太刀を打太刀の腹まで落としながら（刃を右斜めに向けながら打太刀の太刀を押さえる⑨）、左足を真直ぐ踏み出す⑩。

ここまでは「打つ足」で、留まることなく一拍子で行う。

「二の斬り」は一刀兩段と同じ

継ぐ足は、打太刀の右手を押さえた太刀筋を変えないで、右半身のまま前の左足で詰める。

① 撥草に取り上げたときと同じ太刀筋からそのまま打つ。

② 太刀を廻すときに左拳を右肩上に高く突き上げる。

③ 初めの内は技が小さくならないように頭上に真直ぐ取り上げる。

④ 引被るとき左手の中心が正中線を外れない。

⑤ 江戸柳生の伝書に従えばやや斜めから打つことになるが、尾張柳生のように真直ぐに振り下ろす方が理にかなっていると加藤先生は話された。

⑥ 腕をしっかり伸ばして打点を高く打つ。（そのほうがきれいに見える）前の右足に大きく重心をかけるため前の膝は少し折れ、後ろの左足の膝の後ろ（エビラ）は伸びる。

「江戸柳生古目録口伝書」には「腕首」とある。

⑦ 「斬釘截鉄」のこの太刀筋を「斬釘の線」という。腰を入れて「斬釘の打ち」をしっかり打つ。

⑧ 真直ぐに打ち下ろした太刀の線を変えないで、太刀の横から入る。左の肩と打太刀の拳とを比べる。あまり深く入り身にならない。「斬釘の線」を下げた線を「極意の線」という。

⑨ 打太刀は打たれて手を下げるので、無理に力で押し下げる必要はない。

⑩ 打った瞬間に左足を踏み出すので、外目には左足を踏み出して打ったように見えるが、右足前で打つのである。

◎ 取り上げた太刀も打太刀の右拳を打った太刀も、打太刀、使太刀の間の中心線を離れない。

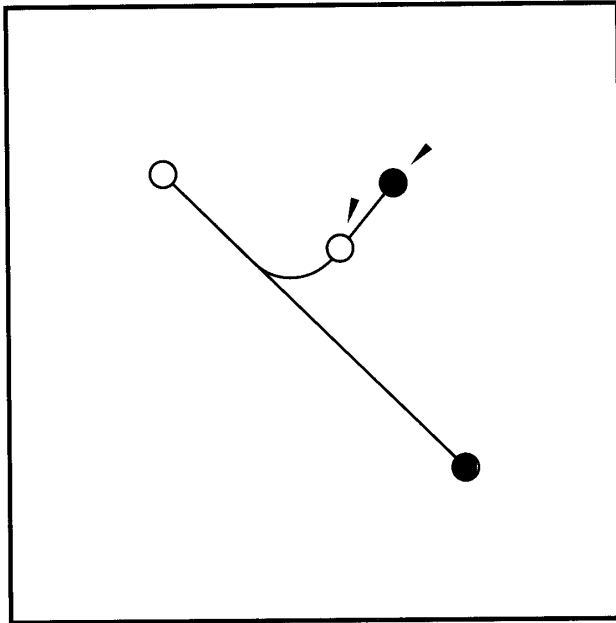
◎ 加藤先生は、そのまま右肩横で太刀を回して打って見せたが、この打ちは左手が絞まり、右手が利くから出来るのであって、最初にそうやると技が小さくなり、左手首が廻って死手^{して}になる。

演武の位置

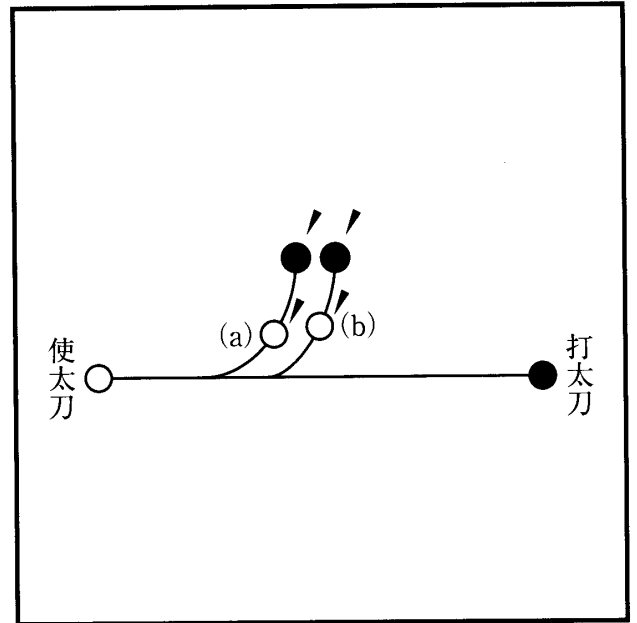
○●は使太刀・打太刀が最初に構えた位置

○'●'は終わった位置である。

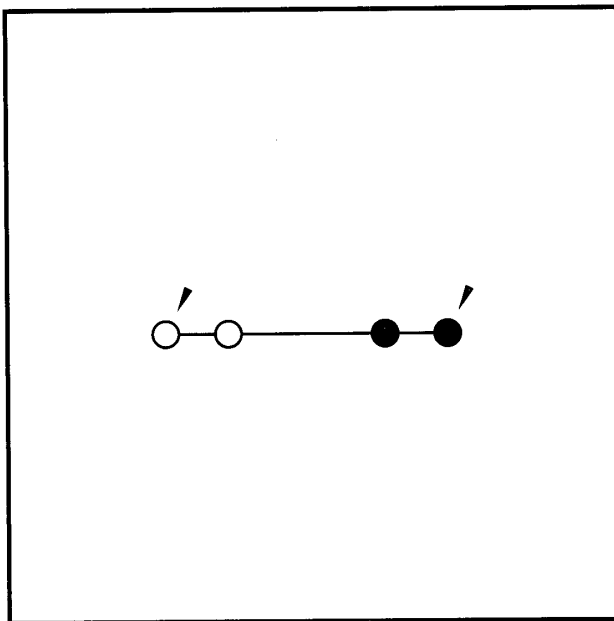
半開半向



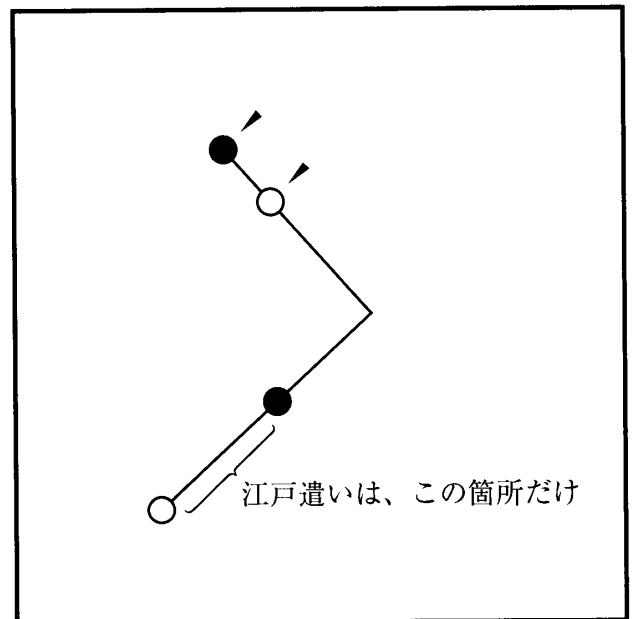
一刀両段(a) 斬釘截鉄(b)

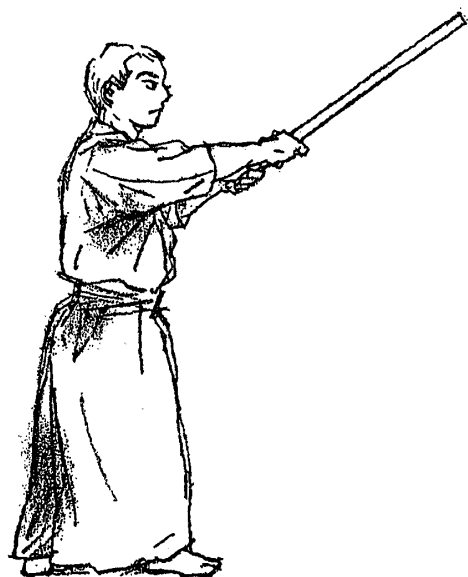


長短一味

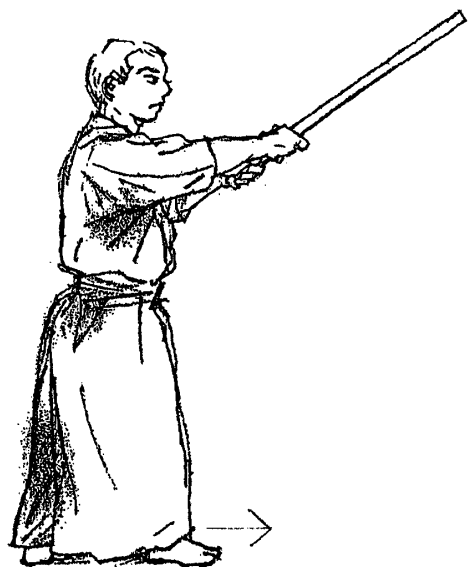


右旋左転





右手を肩の高さに構え、
右足を踏み出すと同時に
撥草になり、



間に入るや、太刀中を打ち砕く
ように打っていく



打太刀の打ちを刃で「当り拍子」
に受け、





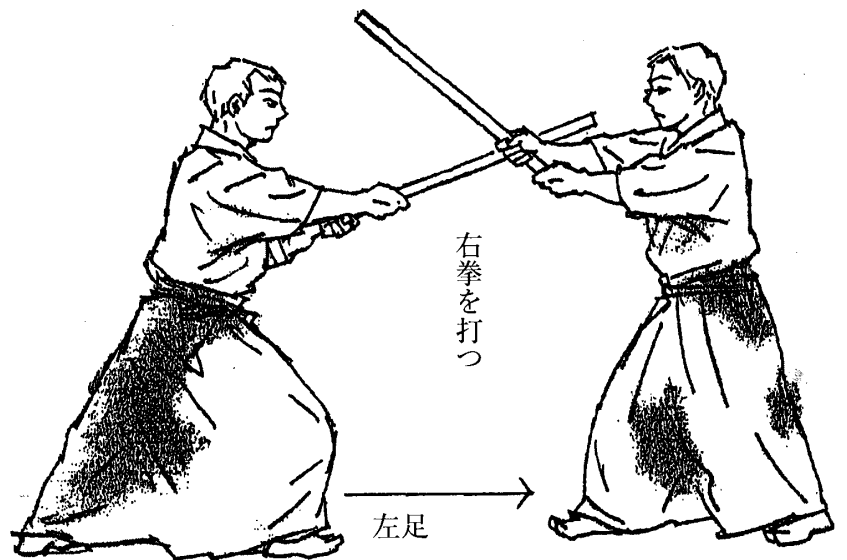
右肩上に太刀を廻し



「斬釘の線」からの打ちを「正面」から見る

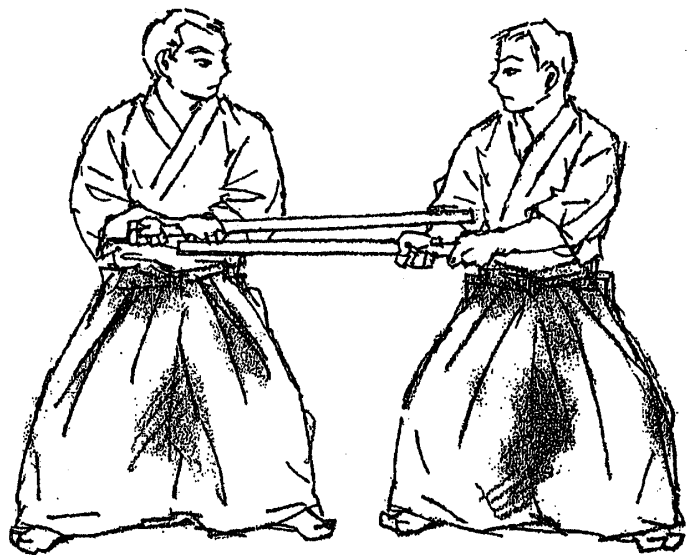


右肩を入れて
ひとえみ
一重身になって



右拳を打つ

左足



刃を右斜めに向け打太刀の手首を
下に押さえながら、太刀の位置を
変えないで横から左足で入身にな
り（膝をエマす）、剣先を打太刀
の腹に付ける。
（ここまでは「打つ足」で、一調
子に留まることなく行う）
「二の斬り」は体勢を変えないで
そのまま「継ぐ足」となる。

用語解説

——『柳生の芸能』「構え太刀の基本名称」より

中段 拳が乳より腰の間。

下段 拳が腰より下。

雷刀 頂上に挙ぐるを雷刀という。

撥草 膝を開き右肩上に刀を挙ぐるものなり。

これ元、草をはらうものなり。刃、斜め
上を指す。

青岸 敵を右少し前に受け、中段斜刀、鋒は敵
の左眼を指す。

城郭勢 青岸の上段なり。敵を右に受け、大
に膝を開き、少し前脚を屈し、後脚を伸
ばし、頭身少し俯す。斜刀、鋒を敵の左
肩に指す。よく身を刀中に隠す間隙なき
ものなり。城郭に入るが如し。

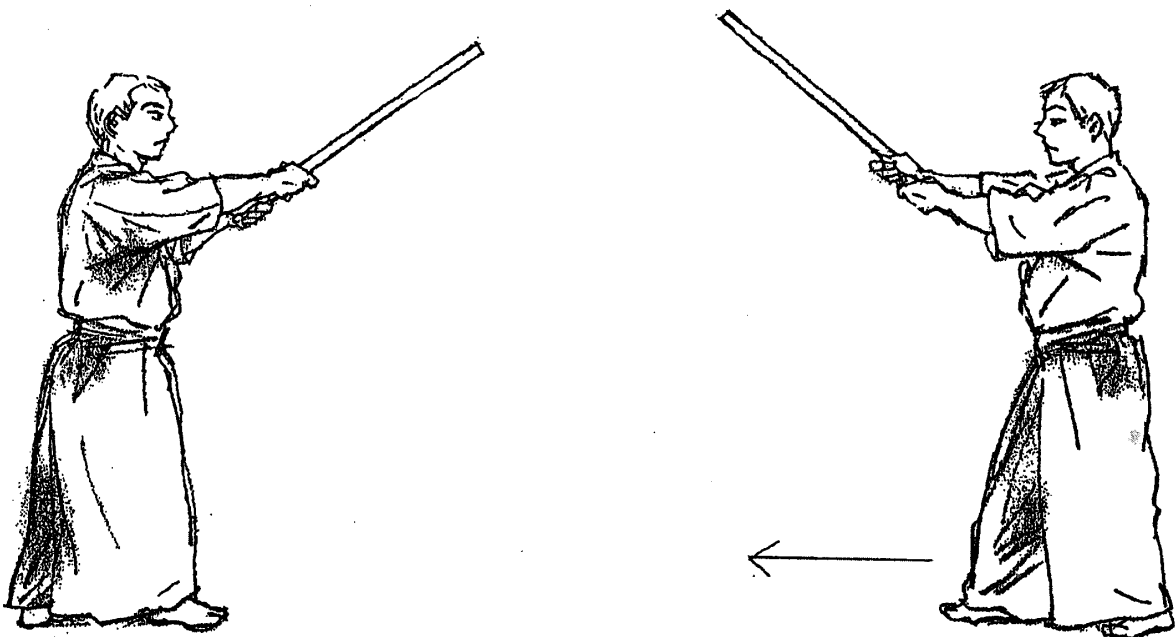
一文字 中段直勢のことなり。江戸柳生にて謂
う。これに堅一文字、横一文字あり。

ト伝一の太刀 中段直勢、かねの積りの構え方
なり。

もじり打ち 両拳をもじり交え斜めに打つな
り。

合し打 少し後れて後打つ。

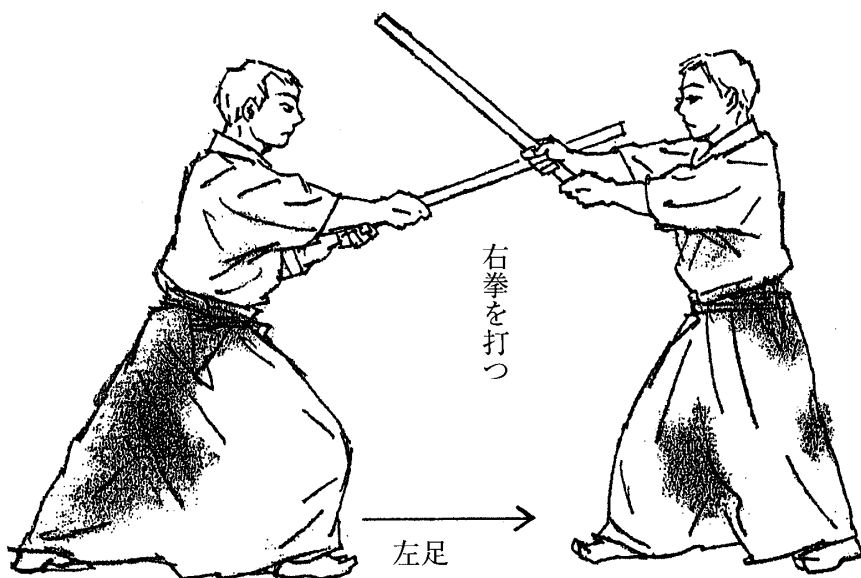
「斬釘截鉄」尾張遣い



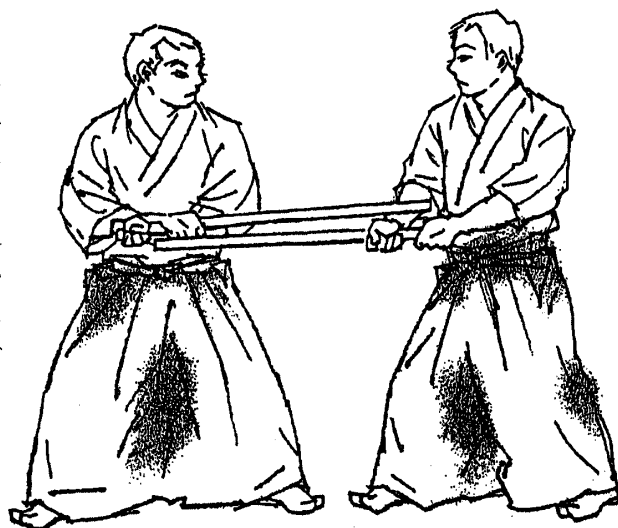


応じて相手の打って来ようと
する気を制し、すばやく太刀
を右肩上に廻し（越す拍子）、

左拳を打っていく



打太刀が手を自分から下げる
場合には、膝をあまりエマさ
ない。



半開半向（はんかいはんこう）

打太刀 青岸に構え、斜めに文を切りながら攻め進む。

使太刀 青岸に構え、斜めに文を切りながら、待つ。

打太刀 太刀先を使太刀の切っ先三寸につけて、機を見て使太刀の左拳を、構えを崩さず切っていく。

使太刀の切り方に三通りある。

一、和卜勝（江戸遣い・尾張遣い）春風館道場では「打ち落し」という。

使太刀 当たる瞬間、

基本（初心者）の打ち

右斜めに僅かに進んで打つ筋を変え、太刀を僅かに右斜め横に上げてから打太刀の太刀を、

本来の打ち

太刀を上げないで、打太刀の太刀をそのまま、

手ではなく足腰の力で斜めに切り落とす（十文字に勝つ）。《打つ足》

打った後、結果として剣先は打太刀の右眼に付いている。

○太刀の動きを出来るだけ小さく、手ではなく体（たい・足腰）を使って落とす。絶対に手首を動かさずに、腰の力で肩腕（かたかいな）を使って剣先で打太刀の太刀を落とす気持ちでないと落ちない。

二、ほうり込み（江戸遣い）

使太刀 当る瞬間、左手首を上にあげて拳への打ちを外す。結果として太刀先は打太刀の両手首の間に差し込まれる。

○実際の勝負では、この後、そのまま突き込んだり、左手首を下げることで打太刀の手首の内側を斬るのであるが、剣先が打太刀の腹にあたる危険があるので、太刀を差し込んで終える。

三、くねり打ち（尾張遣い）

使太刀 当たる瞬間、前の右足を一足長ほど右後ろに引き後ろの左足を右足の斜め左前に進めながら①、左手と右手をもじって打太刀の拳への打ちを外し②、腰を落とし膝をエマす力で打太刀の拳（柄中）をくねり打ちに切り落とす③。

①足運びには何種類がある。

②打太刀の打ちを外すのに、小さく外す仕方と大きく外す仕方がある。（館長の大きく外す仕方は見事である。）

③使太刀の剣先は打太刀の拳の上にあり、太刀の刃は下を向いている。

私の問題点

「和卜勝ち」ほど巧者（こうしゃ）とそうでない者との違いがはっきり出る技は少ない。高弟が打太刀の場合、使太刀である私の太刀が打ち落されてしまう。

考察

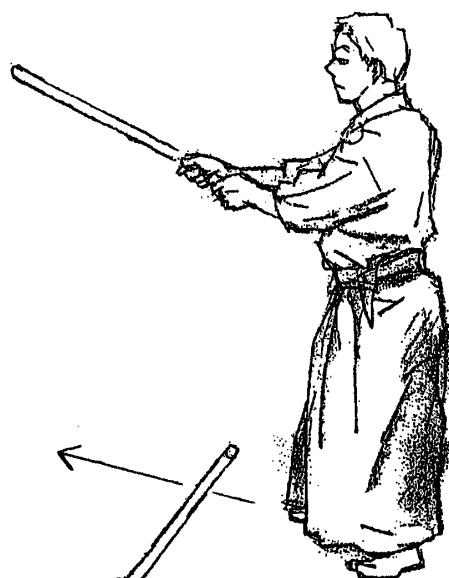
これまで両手をもじって右肩から打太刀の太刀を打ち落す「くねり打ち」で本当に切れるか疑問に思っていた。しかし春風館で、手で切るのではなく、腰を落として膝をエマす力で切ることが「くねり打ち」の術理であることを教わり、加藤館長の見事な技を拝見してこれまでの疑問が払拭された。

「二の切り」は一刀両段と同じ。ただし「二刀両段」「斬釘截鉄」と違って九十度近く廻りこむ。

和かほく卜勝ち・打ち落し（江戸遣い・尾張遣い）



共に青岸に構え
斜めに文を切る



機を見て左拳を切っていく



太刀を上げず、足腰を
使って左斜め下に切り落とす

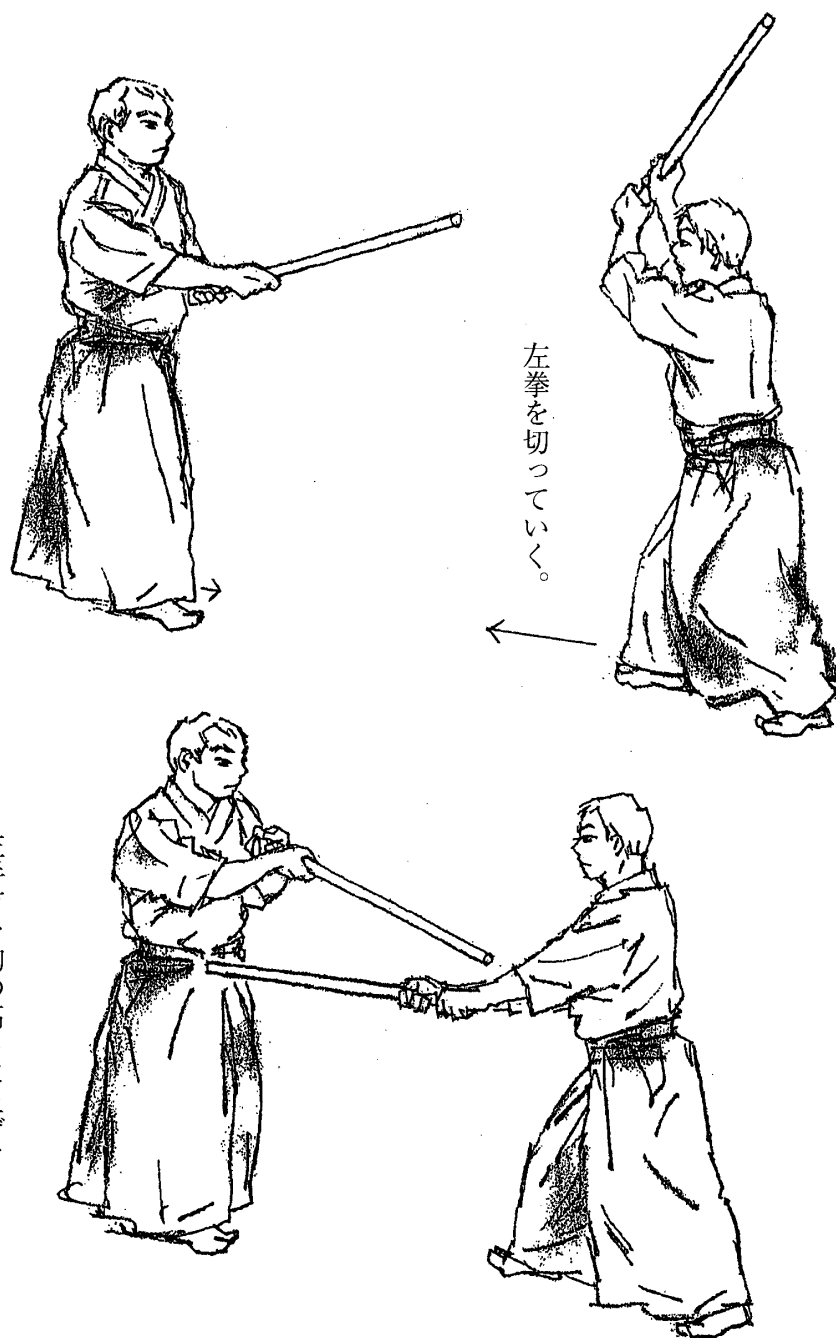


「十文字に勝つ」



半開半向 二

ほうり込み・外し（江戸遣い）



左拳を切っていく。

左手首を胸の高さに上げて
拳への打ちを外す

文を切る^{あや}

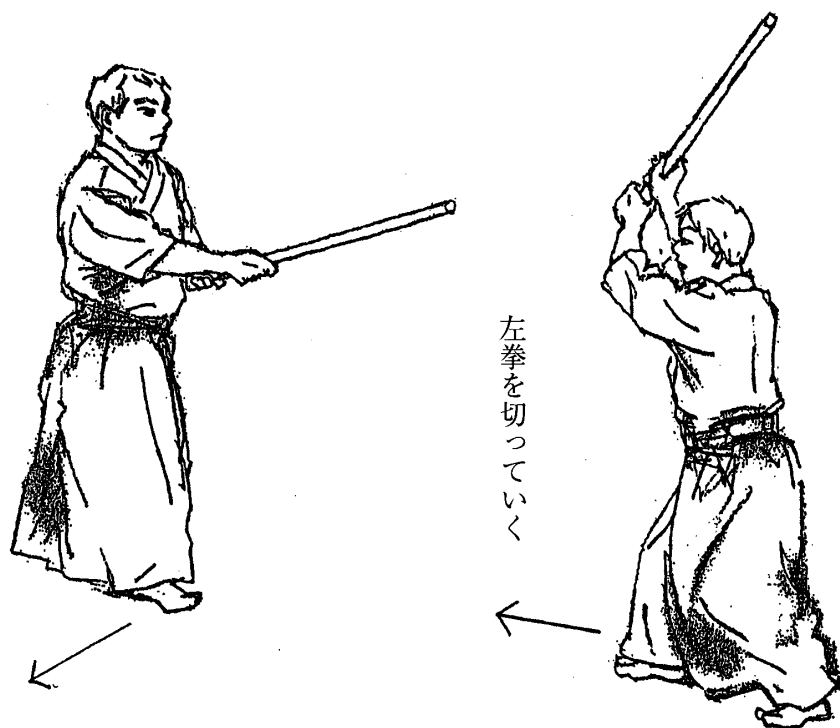
太刀を上下または斜めにシャン・シャンと動かし、打っていくための拍子をとる。自分自身の文を切ることが大切で、相手に合わせる必要はない。太刀を大きく上下したり、手首を使って文を切ると隙が生じるので注意を要する。私の目安としては手元で七、八センチ、剣先で十七、八センチ以内と思われる。

打太刀は打太刀、使太刀は使太刀で自分の文を切る結果、「互い拍子」の文になるのであって、最初から互い拍子に文を切るわけではない。神戸金七『月の抄と尾張柳生』には次のようにある。

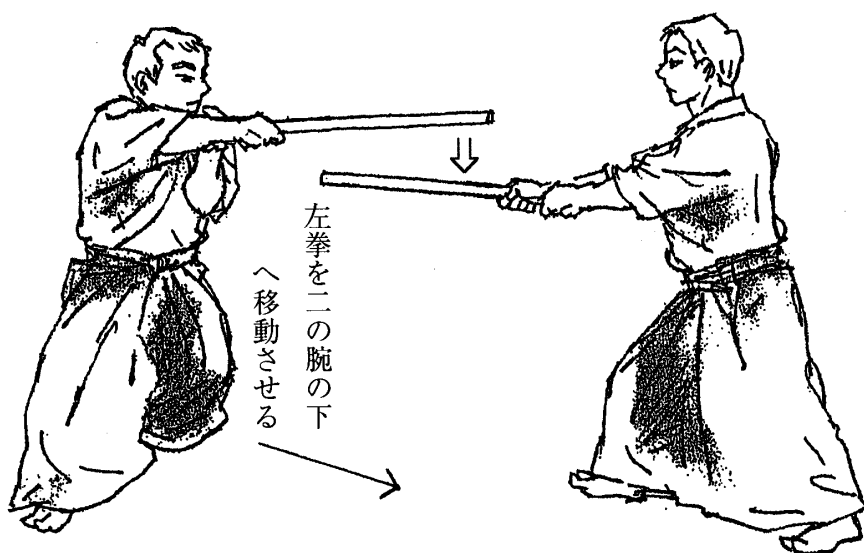
文の截^{きり}あいとは、文は太刀にて拍子を取り小さく打つことである。この截^{きり}相^{あい}とは、打太刀、使太刀の太刀先を打ち払わんとし、使太刀はこれを打落す意にて、互いに拍子を取りながらゆるやかに截^{きり}合うことである。よって「序の切り合い」とも云い、ゆるやかな拍子のことである。

半開半向 三

くねり打ち（尾張遣い）

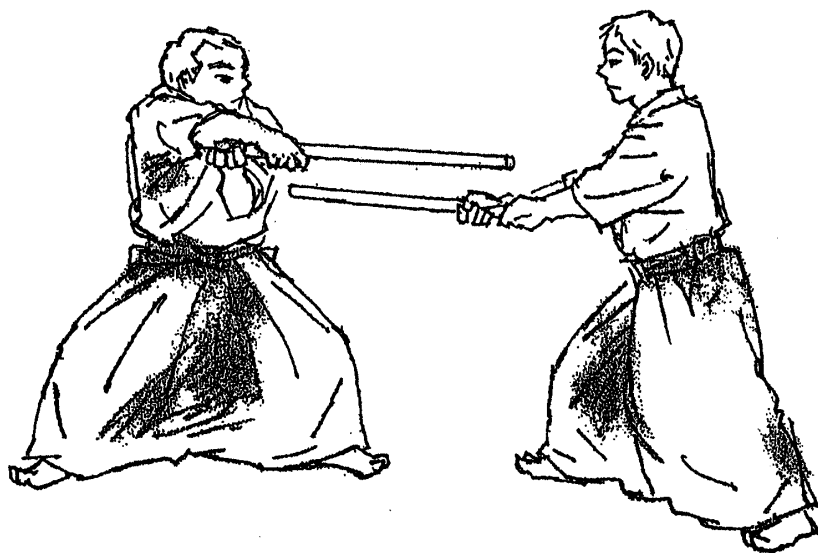


左拳を切っていく



左拳を二の腕の下
へ移動させる

使太刀は次の動作を同時に行う
手・左拳への打ちを両手をも
じって外す
足・右足を右斜め後ろに引くや、
左足をその前に出す



腰を落とし、膝をエマす力で
打太刀の拳を切り下げる

右旋左転（うせんさてん）

江戸遣い

打太刀・使太刀 青岸に構え、斜めに文を切る。

打太刀 手の内強く使太刀の太刀中を、太刀を砕く激しさで打つ。

使太刀 打太刀の太刀を当り拍子で受けた瞬間、

基本（初心者）の打ち

「斬釘截鉄」のごとく、太刀を右肩上に取り上げるや打太刀の右拳を打ち、左足を右足に揃え、同時に右足を大きく引いて右半身になって逆車に構え、肩を見せる。《打つ足》

本来の打ち

右の動作を一拍子で行う。

打太刀 その瞬間、前に出た使太刀の肩を打っていく。

使太刀 「一刀両段」のごとく、足腰を廻して打太刀に正対ながら、太刀

を右腰の右に腰より僅か上に取り上げ、その瞬間、打ってきた打太刀の柄中（拳）を打ち、逆車に引く。

○打ち勝った瞬間、左の肘は伸び、左拳は左腰の前方にきており、太刀先は打太刀の中墨（中心）を外れない。

○後半が次の「長短一味」と同じなのは「続け使い」だからである。

打太刀 使太刀が逆車に引くのに合わせて、左半身に後ろに引きながら太

刀先を下げる。

尾張遣い

打太刀 青岸に構え、斜めに文を切る。

使太刀 正中段に構え、上下に文を切る。

使太刀 機を見て剣先を使って打太刀の剣先を打太刀の左に外す。

○外すときは、そのまま又は右足を小さく前に出して外す。足を大きく踏み出すと、その瞬間が隙になり、打ち込まれる。

○剣先が打太刀の体の線を外れると、打太刀に打ち込まれる隙となる。

打太刀 剣先を外されて、たまらずに後ろに退がる。

使太刀 剣先を押さえたまま隙を見せずにゆっくり付いて行き、機を見て

体を左斜めに転じながら打太刀の太刀の剣先を右に押さえる。結果として城郭勢の構えとなる。と同時にすばやく四、五歩、城郭勢に構えたまま後ろに引き下がり、待つ。

○「打太刀が耐えられなくなって退がっていくところを攻めて行く。中心を取っているわけですから、攻める時はややゆっくり前に出でる。あまり早く攻めると打太刀に反撃の機会を与えてしまう。退がるときはススッと退がる。」（下村氏）

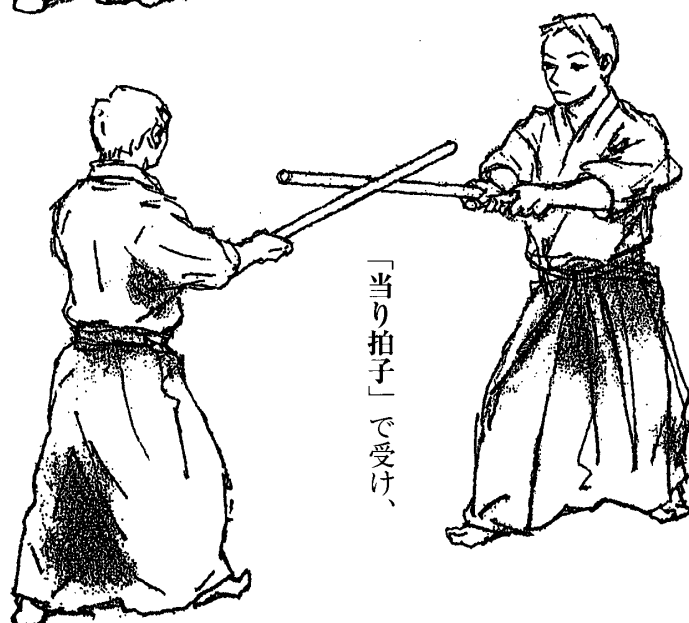
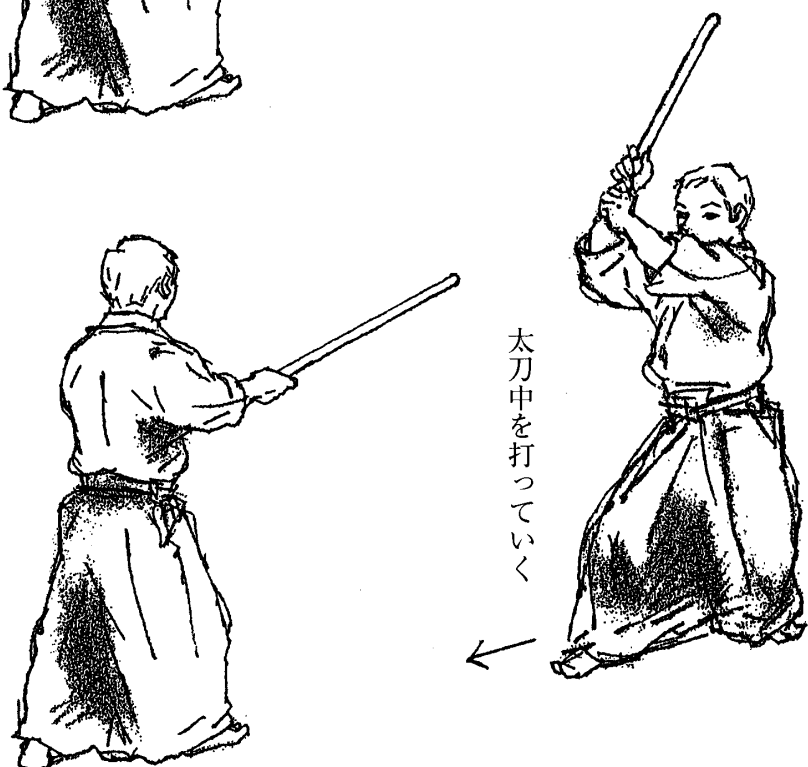
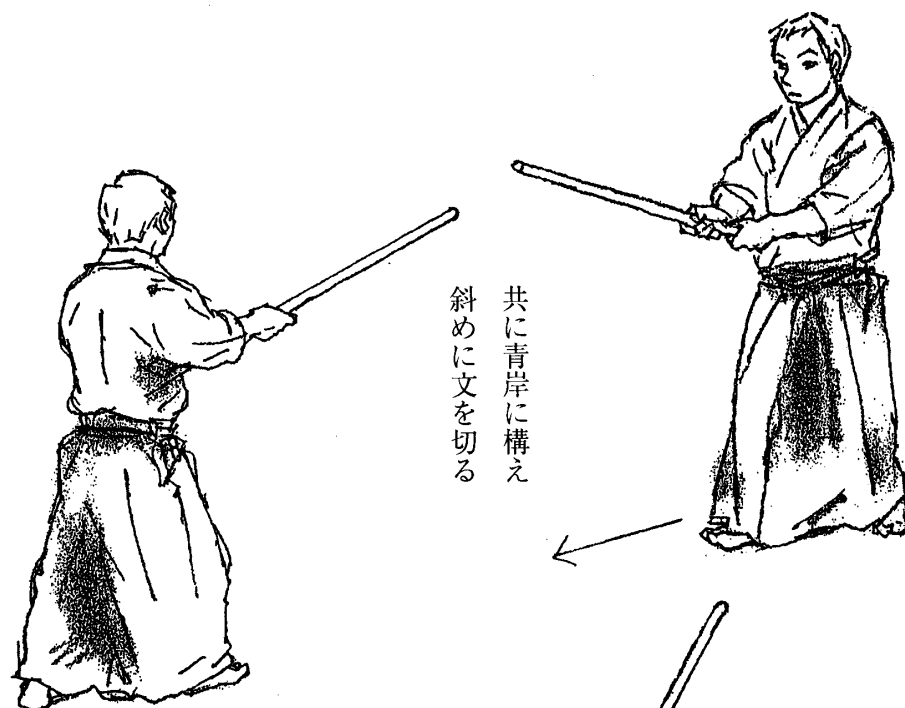
打太刀 打太刀が退がりきるのを待つ、斜めに文を切りながら攻め進み、

間に入るや、斜めに文を切った同じ太刀筋のまま斜め横に太刀を振りかぶり、左拳を斜めに打って行く。

使太刀 後ろの左足大きく引いて打太刀の打ちを抜き、上段から打太刀の頭を真つ向に大きく打つ。

○打つときはビュンと打たないで、位を示して、肩の力を抜いて大きく同じ早さでズンと打ち切る。

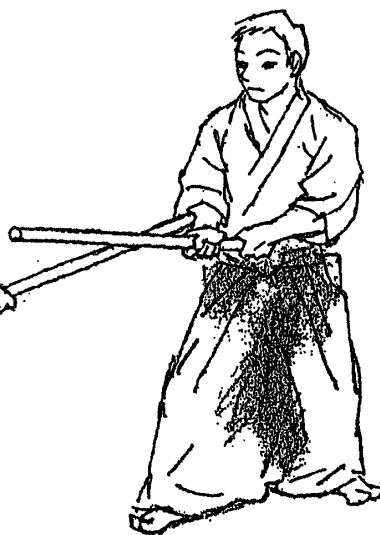
「右旋左転」江戸遣い



太刀を右肩上に取り上げるや、



「斬釘の打ち」で右拳を打ち、



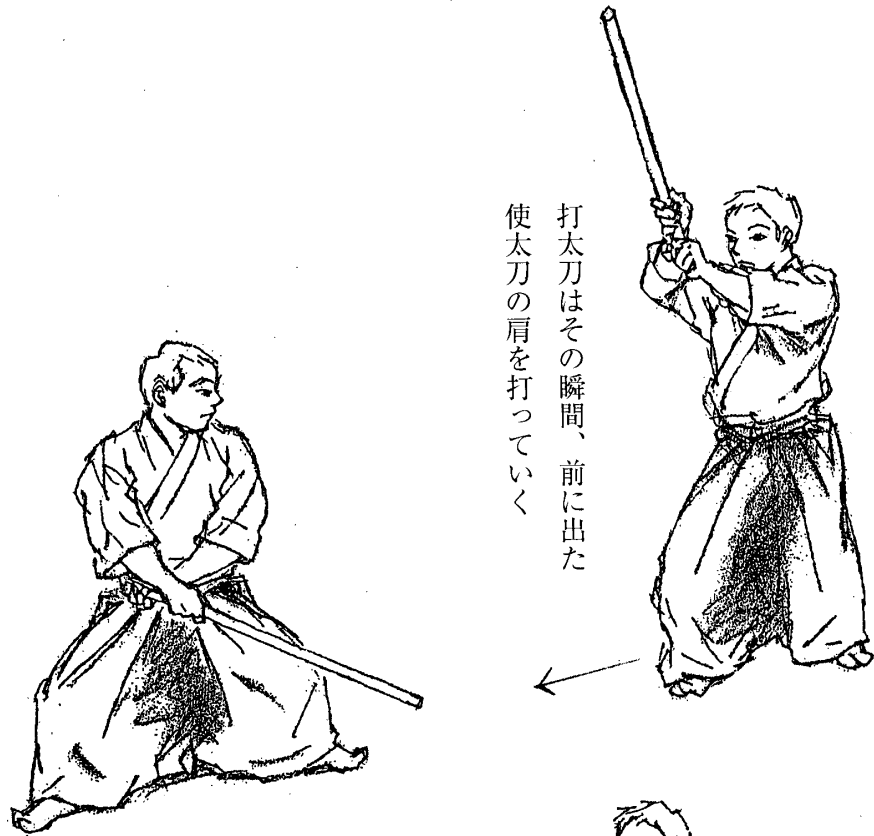
← 右足



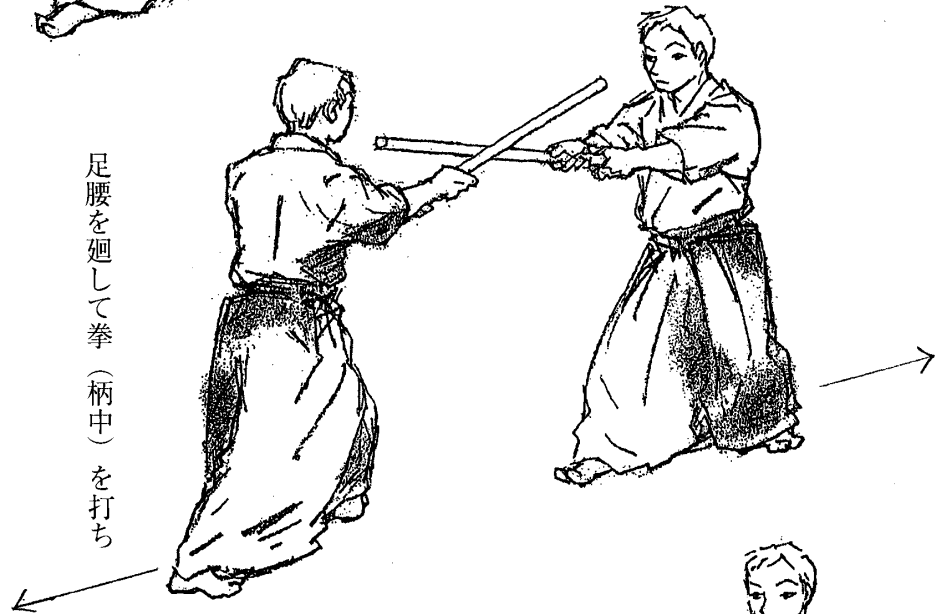
後ろの左足を前の右足に
揃えるや、右足を大きく
引いて逆車に構え、肩を
見せる（当たり拍子に受
けてから、ここまでの動
作は一拍子）



打太刀はその瞬間、前に出た
使太刀の肩を打っていく



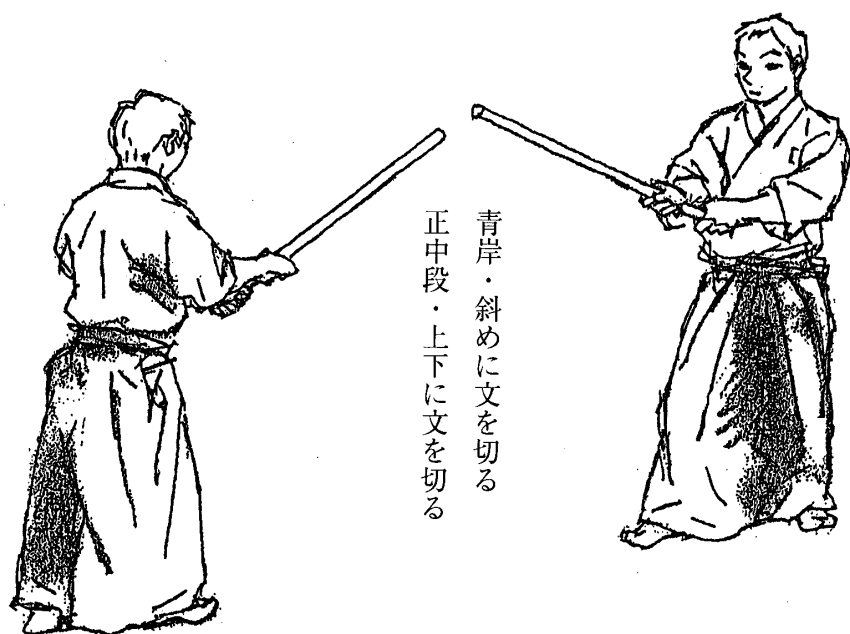
◎打太刀が小手を着けていない場合は
太刀中を打つ場合もある。但し上太
刀となり、剣先は中壘を外れない。



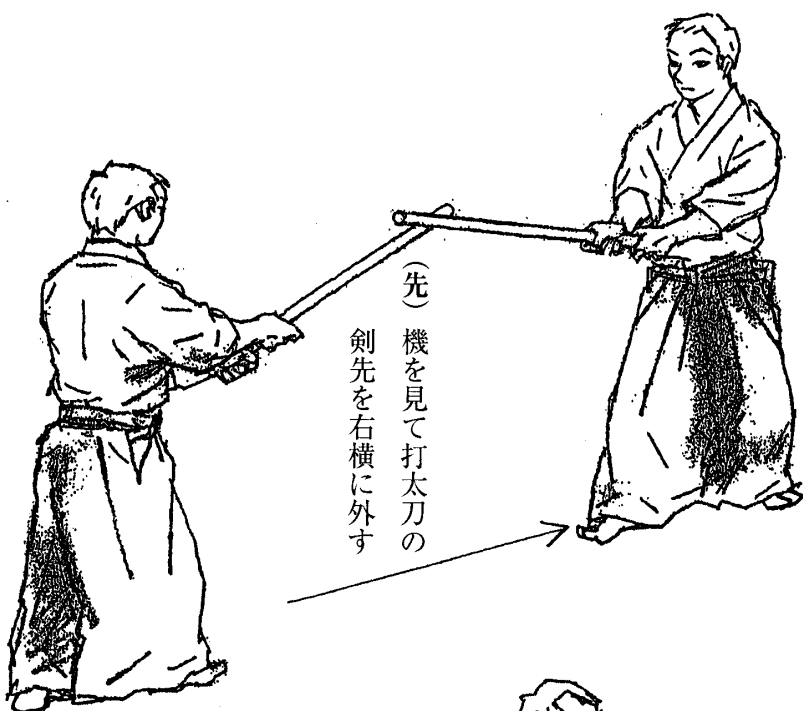
大きく逆車に引く



「右旋左転」尾張遣い

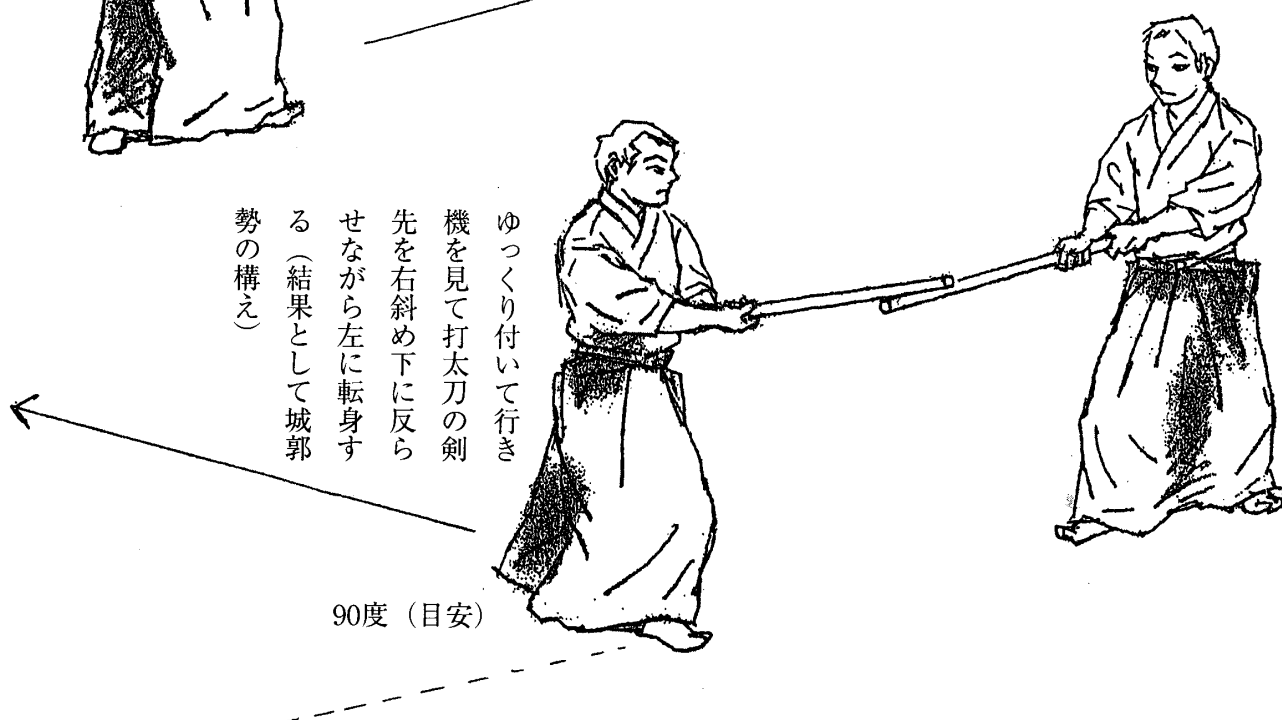


青岸・斜めに文を切る
正中段・上下に文を切る



(先) 機を見て打太刀の
剣先を右横に外す

(後) 剣先を左横に外され、
たまらず退がる



ゆっくり付いて行き
機を見て打太刀の剣
先を右斜め下に反ら
せながら左に轉身す
る(結果として城郭
勢の構え)

90度(目安)



長短一味（ちようたんいちみ）

江戸遣い

打太刀 青岸に構え斜めに文を切る。

使太刀 青岸に構え、互い調子で斜めに文を切る。

機を見て打太刀の拍子を外し（合気を離れる）、足を入れ替えて右半身になり、手をもじり太刀先を前方に落とし、両膝をエマして逆車に構えて肩を見せる。

○構え合った太刀筋から外れないように中墨（なかすみ 身体の中心線）を通ってゆっくり太刀を落とし、剣先は油断なく打太刀の前の膝に

付け、まさに打たんとする打太刀を牽制して太刀を水平に上げる。

○この一連の動作を絶対相手に打ち込まれないようにやる。勝ち口を崩さないことが大事である。

打太刀 その瞬間、前に出た肩を斜めに打つ。

使太刀 かかと踵を廻して打太刀に正対しながら、足腰を使って打太刀の太刀を斜めに切り落とす。（または拳・柄中を打つ）

尾張遣い

打太刀 青岸に構え斜めに文を切る。

使太刀 正中段に構え、互い調子で上下に文を切る。

機を見て打太刀の拍子を外し（合気を離れる）、足を入れ替えて右半身になり、手をもじり太刀先を前方に落とし、両膝をエマして逆車に構えて肩を見せる。

打太刀 その瞬間、頭から肩にかけて真直ぐ打つ。

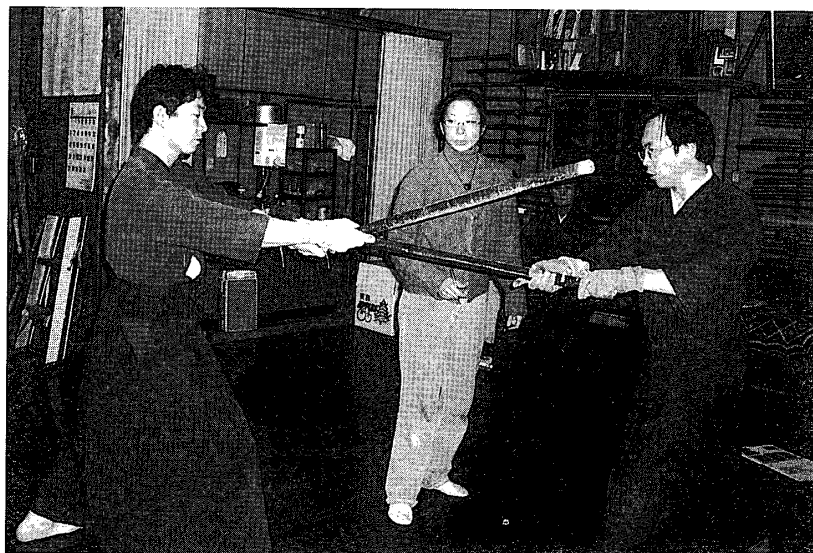
使太刀 後ろの右足をやや前に出し、前の左足をやや後ろに引き、太刀を大きく雷刀に取り上げ、左足を踏み込んで合し打に勝つ。

使太刀 真直ぐに大きく逆車に引く。
打太刀 大きく左半身になりながら剣先を落とす。

○お互いの正中線を外さないように太刀を引き、剣先は打太刀の前の膝に付ける。「三学円の太刀」の最後なので特に大きく引き、位を示す。

○逆車に構えると身体を前に傾け易いが、身体の軸を傾けないように、腰を真直ぐに落として膝をエマす。

「一刀両段」江戸遣い



イラストレーターの佐藤まき子さん
（打太刀・川井武治氏 使太刀・下村幸裕氏）



青岸・斜め、互い拍子
に文を切る



青岸・斜めに文を切る



(先) 打太刀の拍子を外し
逆車に構える



(後) 剣先を使太刀の
肩に付ける



足腰を使って打太刀の太刀
を斜めに切り落とす
最後は四十九頁の二図に続く



その瞬間、肩を斜めに打つ

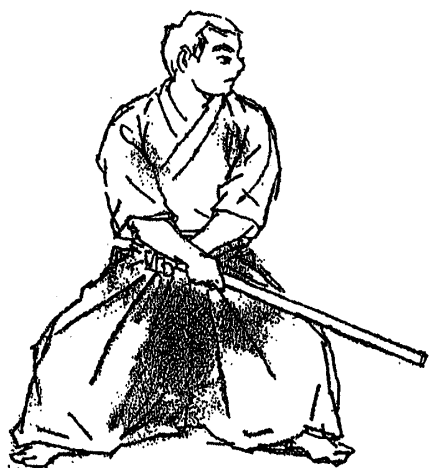
「長短一味」尾張遣い



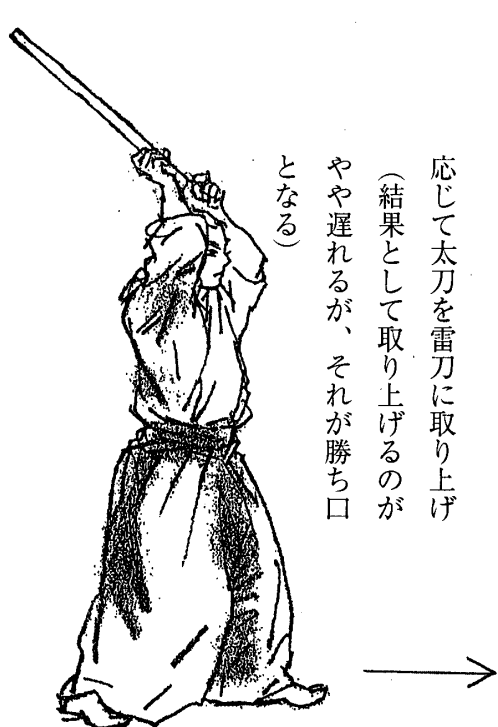
正中段・上下に互い拍子
に文を切る



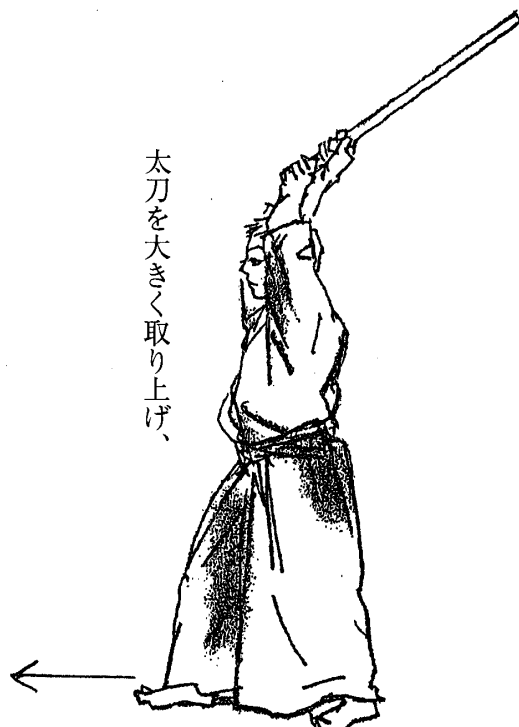
青岸・斜めに文を切る



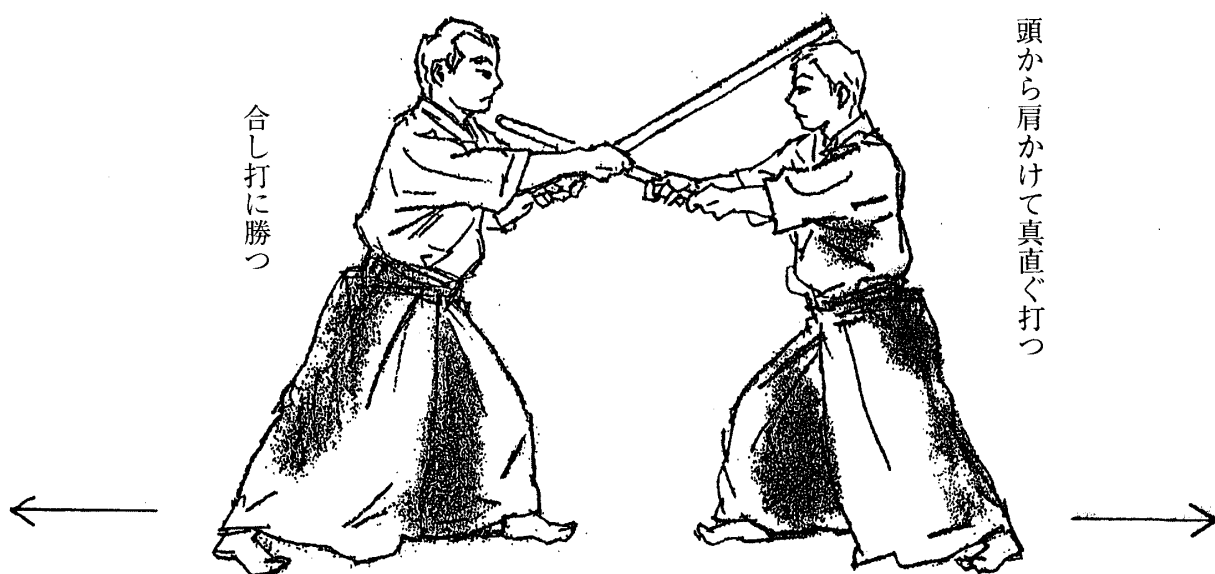
打太刀の文の拍子を外し
逆車に構える



応じて太刀を雷刀に取り上げ
(結果として取り上げるのが
やや遅れるが、それが勝ち口
となる)



太刀を大きく取り上げ、



合し打に勝つ

頭から肩かけて真直ぐ打つ

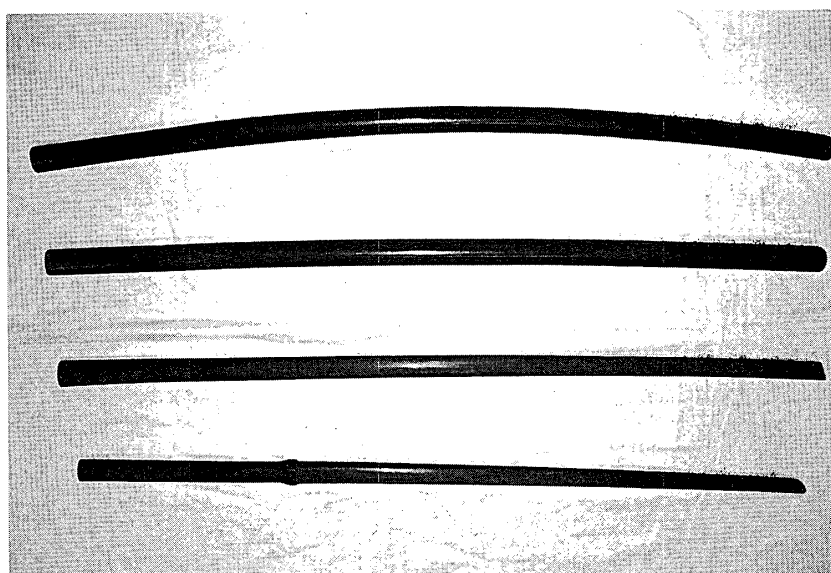


大きく逆車に引く



大きく左半身になりながら
剣先を落とす

春風館所蔵の木刀



連也使用

巖春使用

巖周使用

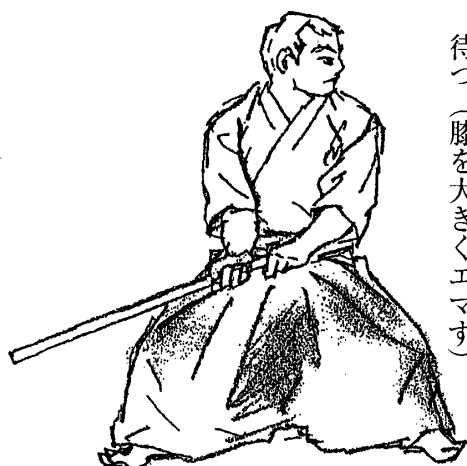
江戸柳生

古伝「二刀両段」

低き撥草（中段）に構え、
進み来て、



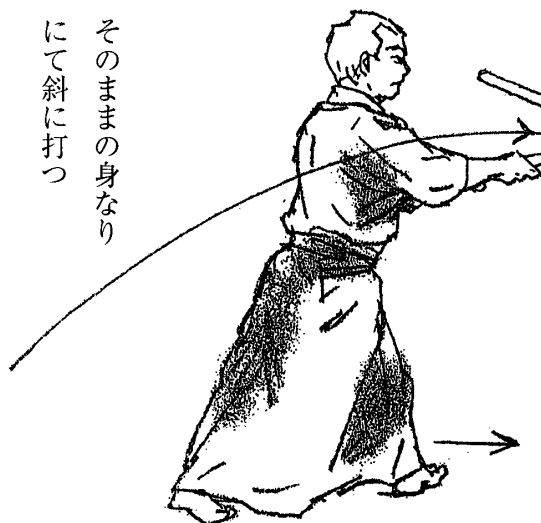
身を低く大股にして構え、
待つ（膝を大きくエマス）



左肩を浅く斜に打つ



そのままの身なり
にて斜に打つ



（後）詰められて一步退く

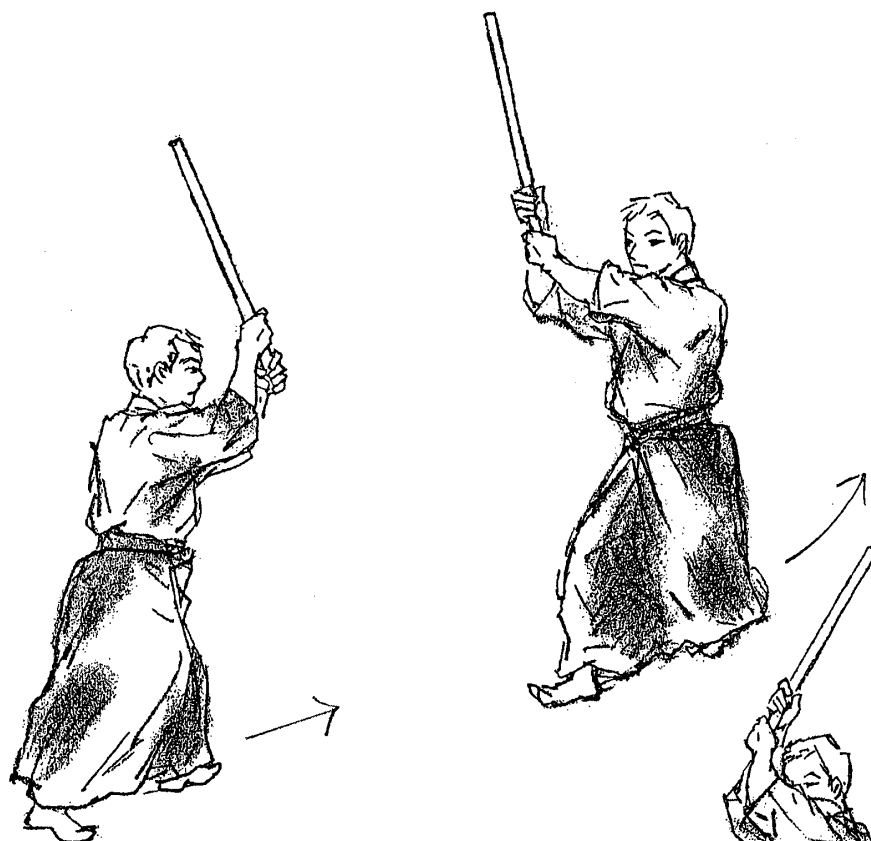


（先）そのまま左足
前で一步詰める



「詰める足」は古伝「斬釘截鉄」「半開半開」に共通

隙を作らないように身を囲いながら
太刀を顔の前に真直ぐ上げ、



太刀を右肩横から下に廻し、
(実戦では鎧で覆われていない
内股を切り上げる)

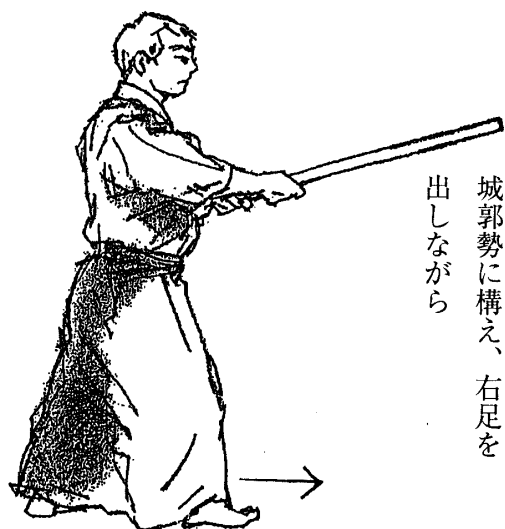


腰を落とし膝をエマす力で
太刀を切り上げ、突き込む
勢いを示す

剣先はまびさし
(目と目の間)に付ける



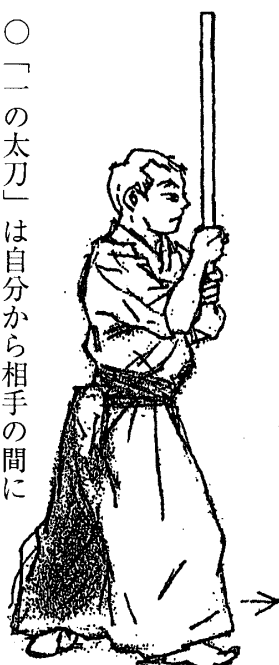
低き撥草に構え進む



城郭勢に構え、右足を
出しながら



(後)「斬釘の打ち」で
右手を打って行く



(先)縦一文字(塚原ト伝の
一の太刀)に構える

○「一の太刀」は自分から相手の間に
入るので、一つ間違えば相手に打た
れてしまう。逃げる太刀でなく、
一刀で相手を仕留める攻めの太刀

(使太刀) 前の足を僅かに
前に出すと同時に後ろの足
を大きく後ろに引きながら
(踏みわり) 打太刀の右手
を「斬釘の打ち」で打つ



「継ぐ足」は尾張遣い
(三四頁)と同じ

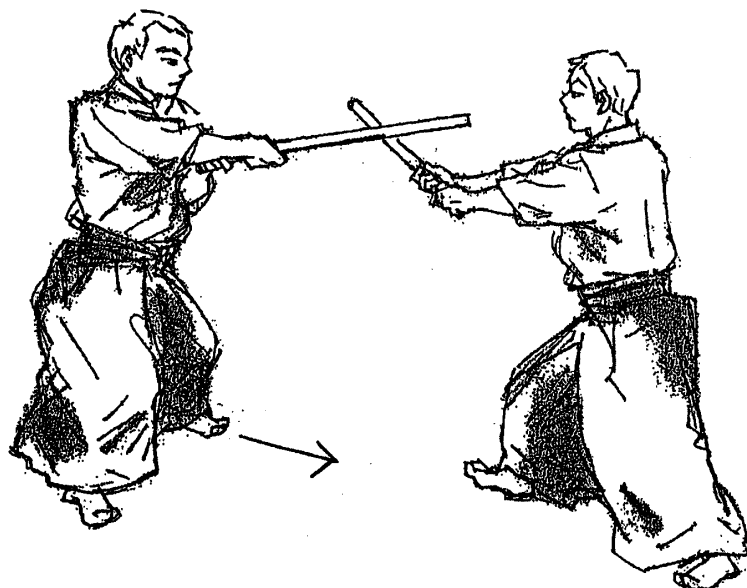


古伝「半開半向」

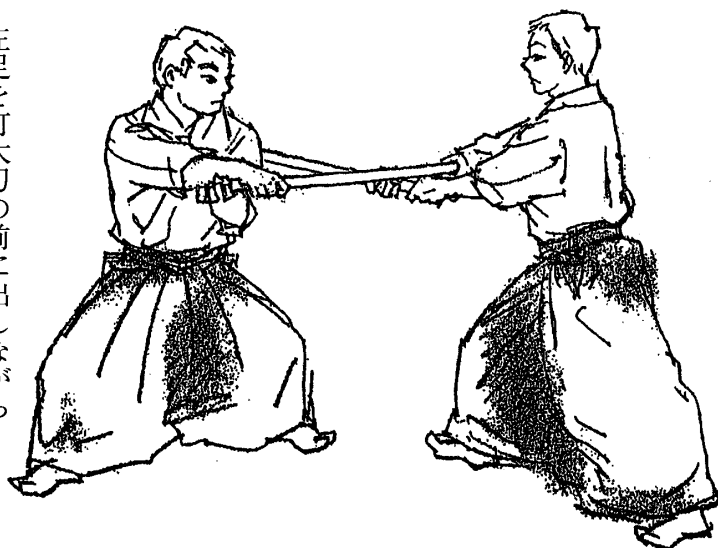
間境まで攻め寄り
左拳を打っていく



右足を右斜め後ろに引きながら
両手を胸の前でもじって打太刀
の打ちから拳を外し

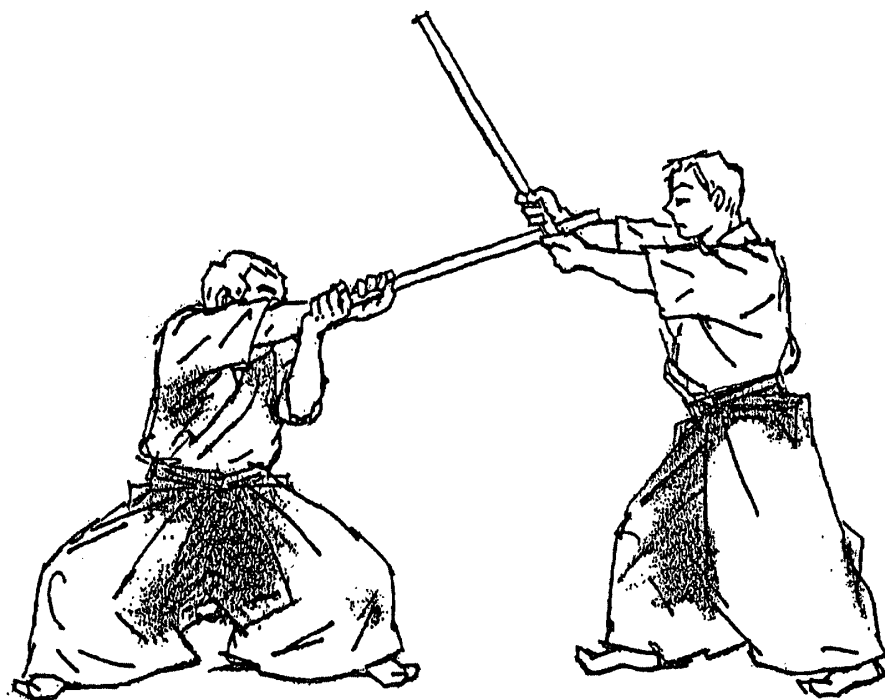


左足を打太刀の前に出しながら
両手首を斜めに切り上げる
(実戦では両目や首を切る場合
もある) 次頁写真参照

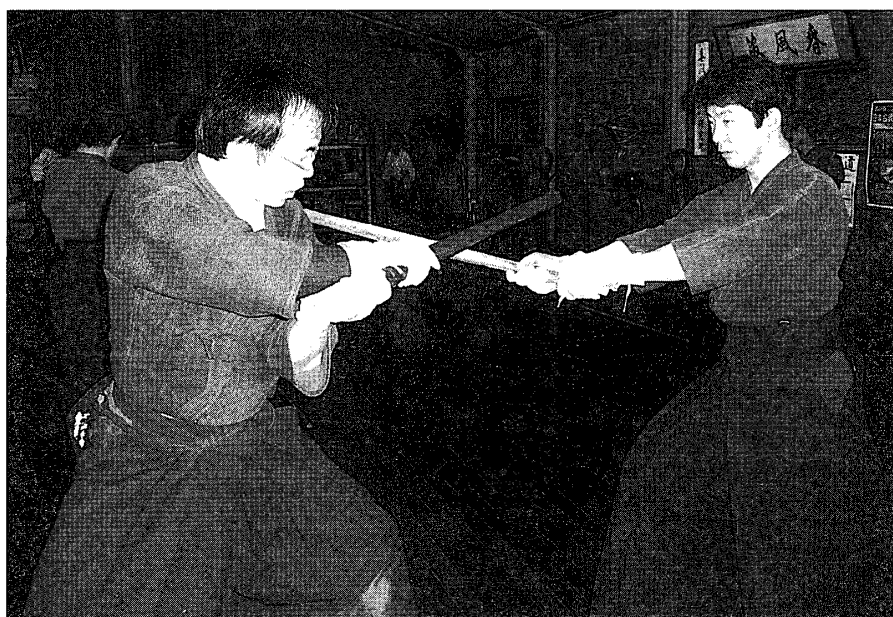


「砕^{くだ}き」(「長短一味」)

「三学円の太刀」のそれぞれに「砕き」(変化)がある。「砕き」は応用技であり、代表的なものに、それぞれ三つあり、「砕き」があつて始めて、「三学円の太刀」は生きたものとなる。道場に秘して表に出さないものであるが、研究のために敢てお許しを得て「長短一味」の「砕き」を一つ示す。しかし術理は記載しない。



古伝「半開半向」



以上が「三学円の太刀」の全体像である。これ以外に「燕飛」^{えんぴ}「九箇の太刀」^{くか}「天狗抄」^{てんぐしょう}「二十七箇条截相」^{にじゅうしちかんじょうさくさう}（尾張は「八箇必勝」）があり、次回以降取り上げていく予定であるが、「三学円の太刀」こそが上泉伊勢守が創始した太刀であり、新陰流でもっとも重要な太刀である。ここに新陰流の極意の一切が現れているという。

私が教えていただいた「三学円の太刀」は、十年以上、道場で厳しい鍛錬をしなければ教えていただけないような内容であった。加藤館長は、技はまだ出来なくても原理だけはしっかり覚えてほしいと、秘伝と呼ばれる太刀も研究のためならばと、惜しげもなく教えられた。普段はビデオ撮影を禁じられているにも関わらず、私が週に一度しか名古屋に來られないことを考慮され、練習のために私が高弟の方に教えを受けているところをビデオに撮ることを許され、また先生自ら高弟を相手にいろいろな勢法を示されてビデオに収めさせて頂いた。

二本目「斬釘截鉄」の右肩からの打ち、三本目「半開半向」の「くねり打ち」など、私が習ったり演武会などで目にしていたものとは全くレベルの違うものであった。特に江戸の「一刀両段」と尾張の「合し打」は見事であった。神戸先生は「尾張の合打か古伝（江戸遣い）の「一刀両段」、これで全部勝てる、ほかのことはやらんでいい」と言われていたそうである。しかし江戸の「一刀両段」も、他の道場または神戸先生が春風館道場以外の道場で教えていたように、いったん肩まで取り上げて打てば、一瞬遅れてしまい、巧者の打ちに勝つことは出来ない。

加藤先生は「一巡りの打ち^{ひとめぐり}というのはこの道場だけです。絶対にどこへも教えない秘伝のひとつです。」と言われる。

「合し打」の可能性については、これまで疑問に思ってきたが、実際に門弟の方と打ち合ってみて完全に打たれてしまった。しかしその門弟の方

も取り上げるとき、一瞬、止まる瞬間があり、一巡り打ちの出来る高弟の方と打ち合うと打たれてしまう。その高弟が、加藤先生と打ち合うと完全に打ち遅れてしまう。先生は足腰が違うといわれる。

それでは技術の差がすべてであろうか。本当の勝負の際は打太刀は肩を打つとは限らない。また間合いを詰められてしまったら、使太刀は型通りに打つことは出来ない。そこで「碎き」・「変化」というものがある。「討太刀目録」には、「碎き」はそれぞれの勢法に代表的なものが三つずつあるが、それぞれにまた「碎き」があり、実際には無数あるという。「三学円の太刀」は「待ち」の太刀であるが、「碎き」の場合は「懸かり」の場合もある。加藤先生には「一刀両段」の碎き三つと「長短一味」の碎きを二つ教えていただいた。とくに「長短一味」の碎きは表には出さない秘剣の一つであるが、研究のためならばと特にお許しを得て一つだけ公表した。上から打ってくる太刀に対して腰を充分にエマして下から切りあげるといふ、原理としては非常に単純なものであるが、その有効性は疑いなかった。「碎き」とは「三学円の太刀」を間違ひなく遣うためにある。

そうすると「三学円の太刀」だけで無数の使い方が存在することになる。そこに技の練磨だけでなく、いかなる変化にも動じることなく自由自在に応じられる「心法」の領域が広がっている。道場には柳生石舟斎の「心法無形通貫十方」の書が掲げられている。この点に関しても神戸先生の『月之抄と尾張柳生』は大変参考になる貴重な文献である。

しかし新陰流の本当の技が出来なければ「机上の空論」に終わってしまふことを痛感している。今回は「燕飛」と「九箇の太刀」を取り上げるが、「三学円の太刀」の練磨は休むことなく続けなければならない。新陰流極意の太刀である「三学円の太刀」以外のすべての太刀が、「三学円の太刀」の「碎き」と言えないこともないのである。

〔資料編〕

「三学円の太刀」の「時代別遣い方」として神戸金七編『柳生の芸能』より「江戸柳生古目録口伝書」と「流祖時代上泉子、石舟斎子（永禄九年より天正、慶長年間）」いわゆる「古伝」を示す。『柳生の芸能』は校正が十分でないので、読みやすいように若干文章を整えた。

江戸柳生古目録口伝書による使い方

一刀両段

使太刀は車の太刀に構え、待つなり。打太刀は青岸の下段に構え、打つにはあらず、「新当流その具足に当って其の法を現す」と云うことあり、「その心持をもつて使太刀の右の方へ仕掛けて懸かるなり。

「懸かるところを、使太刀、打つ足身はそのままおき、右の肩を入れて」打太刀の柄の内へかけ打つなり。（打太刀は）打たれて太刀を「右の肩へかたげ（撥草にとり）」右の足を後へ引く。

使太刀、その（打太刀が）引くに随いて右の足を開き、「青岸の上段」にて打太刀のかたげたる「左の手首へ付ける」なり。「太刀先は敵の左の眼を外さず」、足の踏み様、身のひずみなき様に三学の心持にて遣うなり。

解

「新当流その具足に当ってその法を現す」とは、新当流にはその太刀に当ってその手立てを考えると云うこと（がある）なり。

「その心持をもつて使太刀の右の方へ仕掛けて懸かる」とは、車は元より下よりは弾ぬることある故に、それに心を付けて切つ先を脇より拳の闕へ付けて懸かることなり。

「懸かるところ」とは、打太刀、やや斜めに使太刀の肩に浅く切りか

かると云う意なり。

「懸かるところを使太刀、その打つ足身はそのままにおき、右の肩をいれかけて」とは始めの形を崩さず、打太刀の左に少し寄ることなり。「打太刀の柄の内へかけ打つ」とは、打太刀の両拳へ十文字と勝つことなり。

「右の肩へかたげ」とは、撥草にとることなり。

「青岸の上段」とは、五箇の身の付けを云う。

「左の手首へ付ける」は昔の遣い方なり、悪し。手は脇に付けることなり。「太刀先は左眼を外さず」は好し。

斬釘截鉄

使太刀は身をひとえにして「一文字の太刀」の如くに高く構え、太刀先を打太刀の顔中へ突きかけて懸かるを、打太刀の構えも相構えにて、使太刀の太刀を横に打落とす様に打つを、（使太刀）受け流して打太刀の右へ廻りかけて、「左の肩を打太刀の拳に比べ」、右の足を開き、手をもじりて打太刀の右の腕首を打つなり。

打太刀、打たれて初めのごとく肩へ引く（撥草に構える）ところを、使太刀、それにつれて打太刀の左へ直り、初手のごとく青岸の上段に付けるなり。

解

一、「一文字の太刀」とは中段直勢のこと

一、向構えなれば、ひとえ身の要なし

一、この形は互いに相がかりに懸かるよし

一、打太刀、使太刀の太刀を斜め横より打砕く様に打つを、（使太刀）架け流して右へ廻る。

一、「左の肩と打太刀の拳と比べる」とは、左の肩を太いに入れかけることなり

半開半向

使太刀、青岸の中段、「太刀をひらめ」、左の肘を伸ばし「太刀先を打太刀の目へ付きかけ」構えるなり。打太刀も相構えなり。（打太刀は）使太刀の太刀先三寸へ付けて、使太刀の左の拳を構えを崩さず切るなり。切らせて使太刀は右の足を後へ引き、左の肩を拳に比べ、「手をもじりて」上より打太刀の両手の間、柄の内を打つ。

（打太刀は）打たれて初手のごとく肩に太刀をかたげて（撥草になつて）引く。（使太刀は）それに随い青岸の上段にて付くるなり。付けは三つとも同じ事なり。

解

一、「太刀先を相手の目へ付ける」とあるは、この場合、順の青岸なるにより、左の目へ付ける。

一、「太刀をひらめ」とあるは、直中段よりやや斜めなるを云う。

一、打太刀、使太刀の太刀先三寸へ付けて、使太刀の拳三寸を打つ。

一、「手のもじり方」、刃は下斜め左を向く。

右旋左転

たがい一文字の太刀の中段なり。「使太刀より打太刀の左の方へ廻りかけて序を切りかけ」待つなり。「その時、打太刀、序を合わせ」、手の内強く使太刀の太刀中を横に打つなり。使太刀、それに随いて打太刀の太刀の下をくぐり、打太刀の右腕首を打つなり。

（打太刀は）打たれて青岸の中段に直し、たがい相構えにて序を切りかけ、

使太刀はまた今度は打太刀の右の方へ廻り、序の切り合いをするとき、打太刀、その構えを崩さず使太刀の左の拳をかけ打つとき、使太刀、打つところを「越しかけて打太刀の柄の中、両手の間を打つ」なり。

解

「使太刀より打太刀の左の方へ廻りかけて序を切る」とは、左の方へ廻りかける心を持ちて、その場にてあやを切るものとす。

「その時、打太刀、序を合わせ」とあるは、普通使うときは二つあやを切り三つめに強く使太刀の太刀中を横斜めに打つものとす。もつとも、巧者にいたりては序を合わすこともなく、心に使太刀の拍子を取り、自由に太刀中を払う。

「こしかけて打太刀の柄中を打つ」とは、拳を上外して打つことなり。

長短一味

これも一文字の太刀の中段にて序を切るなり。打太刀、右の二ツの切りかけもなく、中筋を用心して使太刀のはたらきを見る。使太刀、序切りの内より身を入れかえ足を立てかえて、くるま（車）の身位に直り、手をもじり太刀先を左のつま先へなして、欠く心持ちにて身を下に沈むなり。

打太刀は使太刀の直るに随いて、序切をやめ、使太刀の肩先へかけて打ち懸くるなり。使太刀、それに随いて太刀先を上げて、下より敵の柄の内を打つなり。

長きも短かきも一つになるによりて一味と云うなり。一度伸ばしたくば、身を縮めよと云うこと、この心持なり。

解

一、「一文字の太刀」、堅一文字直中段のことなり。

一、「欠く心持にて身を下に沈む」とは、打太刀の拍子を欠く心持なり。

あやを切る半間に太刀を下に落とすこと。

一、「下に沈む」とは、股を開き両膝をエマし、低き姿勢になること。

一、打太刀の構えは青岸にて、あやを切るものとす。

流祖時代 上泉子、石舟斎子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

一刀両段

使太刀 五ヶの身の教えにて身低く大股にして構え待つ。拳を我が人中路より少し右に置く。車の構えなり。

打太刀 低き撥草（中段）に構え、進み来て（使太刀の）左肩を浅く斜に打つ。

使太刀 そのままの身なりにて斜に打つ。

打太刀 打たれて遠く引きあげ頭鬢上にかぶ（被）る。

使太刀 その拍子に連れて真眉指下に撞き込むなり。

斬釘截鉄

使太刀 五箇の身の意にて股をふみ開き、前へかかり、直中段にて進む。

打太刀 撥草に取り、進み来りハスに打つ。

使太刀 直ちに抜け替わり、拳を打つ（打太刀の、ハスに打つ先を越して拳を打つ）

打太刀 引き上ぐるを截鉄と付込み撞くこと両段と同じ。

半開半向

使太刀 五箇の身の意にて股をふみ開き、青岸に構え、待つ。

打太刀 撥草に取り、進み来りて吾（使太刀）が左拳を打つ。

使太刀 小口に打太刀の左右腕首をくねり打つ（刃は斜の下に向う）。引き上げ方、前に同じ。

右旋左転

使太刀・打太刀とも股を開き青岸に構え、互いに拍子を取りながら緩やかに截り合う。

打太刀 太刀先へ文を截りかけ前を塞ぐとき、

使太刀 その拍子を切り下げ裏へ抜け（打太刀の右側）、左足を踏み出し、右足を詰めて敵の右手に勝つ。

左転

打太刀 抜けて勝ちたるままのところを、

使太刀 直ちに順に柄中へ打つ。

使太刀 そのまま逆に相懸け流し、魔の太刀にて越して少し開き、打太刀の左肩より拳をかけ左転と勝つなり。

注

魔の太刀とは輪の太刀、すなわち太刀を逆に雷刀に上げ、順に廻し打つことなり。

長短一味

使太刀 直中段、五箇の身にて文を切り、半の間に変化して捨てたる形を取る。身、前へかかり下段にて太刀先高く打太刀の帯の上へあり。

打太刀 浅く少しすじかつて肩を打つ。

使太刀 浅く柄中へはすに勝つなり。